



|                  |                                                                                           |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」（第一冊）翻刻・その1                                                         |
| Author(s)        | 小林, 理正; Kobayashi, Tadamasa; 新開, なつみ 他                                                    |
| Citation         | 北海道大学文学研究院紀要, 176, 1 (右) -62 (右)                                                          |
| Issue Date       | 2025-07-28                                                                                |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/bfhhs.176.r1">https://doi.org/10.14943/bfhhs.176.r1</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/95788">https://hdl.handle.net/2115/95788</a>         |
| Type             | departmental bulletin paper                                                               |
| File Information | 03_176_Kobayashi.pdf                                                                      |



大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」(第一冊)  
翻刻・その1

小林 正・新 開 なつみ

一

平安時代後期成立と目される作り物語の一つに『とりかへばや』がある。現存本は、いずれも享受者らの手で改作されたもので、原作本は伝わらない。当初の物語と、現存本の物語との違いは『無名草子』や『風葉和歌集』から読み取ることができる。

現存『とりかへばや』の伝本は、その数が一〇〇を越えるとされる<sup>(1)</sup>。書き写された数が多いが、版本は印行されていない。この物語の諸本群は通常本系統(第一種〜第四種)と異本系統(第一種〜第二種)の二系統六種および混合本に分けられ、<sup>(2)</sup>伝本それぞれの位置づけが検討されている。その中でも異本系統とされる伝本は、残存数の僅かなこ

とが知られている。第一種本には天理大学附属天理図書館本 [913.39—Y 15—1 (～5)] および筑波大学附属図書館本 [Y 120—238] が、第二種本には静嘉堂文庫本 (イ本注記) [514 函4 架21253] が挙げられる程度であった。しかしながら近時、早稲田大学九曜文庫蔵本 [文冊30 C0082] (以下、早稲田本) が第二種本にあたる旨、千葉直人<sup>③</sup>が指摘し、異本系統本あるいはこれとの関係が疑われる伝本が新たに見出された。また、国文学研究資料館長谷章久旧蔵本 [93-80-1 (～5)] (以下、国文研長谷本) は異本系統本との近さが窺われるが、第一種本および第二種本とも異なる事例を有している。<sup>④</sup>現状、異本系統の伝本と推定されるが、その正確な位置づけは未詳なままとなっている。通常本系統の伝本に比べ、異本系統の伝本の研究は残存数が少ないことに加え、その本文を簡便に確認し得ないという状況であるがゆえ充分になされたとは言えない。

## 二

こうした異本系統の伝本群と関係すると思われるのが、このたび紹介する大阪大学外国学図書館蔵本 (以下、阪大本) である。以下、当該本の略書誌を示す。

【請求記号】J340.123.11 (～5)

【冊数】五冊

【装訂】袋綴 (表紙・紺地に己繋ぎ)

【料紙】楮紙

【法量】〔第一冊〕縦二六・九糎、横一八・四糎 〔第二冊〕縦二六・九糎、横一八・四糎

〔第三冊〕縦二六・六糎、横一八・三糎 〔第四冊〕縦二六・六糎、横一八・三糎

〔第五冊〕縦二六・七糎、横一八・二糎

【外題】「とりかへはやの物語 一（五）の巻」（表紙左肩題簽）

【内題】外題ト同ジ（扉）

【丁数】〔第一冊〕墨付丁数六一丁ウ 〔第二冊〕墨付丁数三三丁ウ 〔第三冊〕墨付丁数五八丁ウ

〔第四冊〕墨付丁数四二丁ウ 〔第五冊〕墨付丁数三〇丁ウ

【一面行数】一一行

【一行字数】二四字前後

【字高】〔散文〕二〇・五糎前後 〔和歌〕一九・五糎前後

【和歌書式】一行書き（行頭一字下げ）

【識語・奥書】ナシ

【蔵書印】「第五臨時教員養成所圖書之印」（前見返し） 「第五臨時教員養成所圖書」（墨付丁数一丁オ）

「大阪外國語學校圖書印」（墨付丁数一丁オ） 「大阪外語圖書」（墨付丁数一七丁オ）

〔※第二冊のみ墨付丁数一八丁オ〕

【その他】〔第五冊〕後見返し「とりかへはやの物語<sup>大尾</sup>」トノ尾題アリ

法量と字高・一面行数の一致に加え、その手跡から判断するに全五冊、一揃いの伝本であると考えられる。以下、

阪大本の本文を具体的に確認していく。なお判読の便を図るため、私に清濁の区別、鍵括弧を施すなどして本文を掲げたが、そのほかは原本の表記を尊重した(特記しないかぎり、以下同様)。

○ 阪大本・第一冊・三六丁ウ〜三七丁オ

かゝるたがひめはいできぬるぞなどいと思ひとぢめつる

心地して経をつくぐとよみ居給へる何となくもの思は」三六丁ウ

しき御心のすむにまかせて「弘誓深如ぐぜいしんによかい」とうち

あげていみじうたふとくよみ給ふなるをきゝふし給へる

女中納言は心に任せ、「弘誓深如ぐぜいしんによかい」と『法華経』の一節を口にする。女中納言が口にした経文をめくって諸本、異同が確認される。たとえば『新編日本古典文学全集』(小学館)の底本・国文学研究資料館蔵初雁文庫本(以下、初雁文庫本)の本文は、次のようにある。

○ 国文学研究資料館蔵初雁文庫本・巻一・三九丁オ<sup>(5)</sup>

めつる心地して経をつくぐとよみる給へるなにと

なくものおもはしき御心のすむにまかせて「四字分空白」

「一字分空白」とうちあげていみじうたふとくよみたまふな

るをきゝふし給へる女君の御心ちたへがたうかなしく

初雁文庫本の本文、その一部を行取り・字配りはそのままだに掲げた。「御心のすむにまかせて」うちあげられた一句、これにあたる本文が同本にはなく、代わりに同じ行末四字分相当の空白と、行を変え、一字分相当の空白が置かれて

いる。「ぐぜいしん弘誓深如海によかい」を有している伝本は、たとえば鈴木弘道『とりかへばや物語 本文と校異』（大学堂書店、昭和五三年）収録本の中にはない（一三四頁）。この本文状況は既存の本文資料が異本系統の伝本を収めていないこととも関係している。異本系統本を確認すると、第一種とされる伝本・二つと、国文研長谷本が、「ぐぜいしんによかい」との一文を備える。それゆえ、阪大本と異本系統本（第一種）との近さが窺われる<sup>6</sup>。

錯簡ゆえに文意を充分に読み取ることのできない箇所が阪大本にはある。以下、初雁文庫本と阪大本の本文を対照して掲げ、その具体相を確認する。

○ 初雁文庫本・卷一・三三丁ウ～三四丁オ

「まことに御けしきなをれいならずげなり。たきのよどみはづかしげなるまでもやせ給にけるかな。御心ちのくるしきにはあらず。いかなる御心ちのみだれぞ」とうちほゝゑみていひあてたるに、おもてあかむ心ちすれど、これにぞうちわらはれて、「しほれすかたはいまのみや御らんずる」といたくみだれぬほどのけしきにて、かへりいで給。

○ 阪大本・第一冊・三四丁オ～三四丁ウ

「まことに御けしき猶例ならずげなり。瀧のよどみはづかしげなるまでもやせ給ひにけるかな。御こゝちのくるしきにはあらず。いかなる御心のみだれぞ」とうちほゝゑみていひあてたるに、おもてあかむこゝちすれど、これにぞうち★思ひよりにけると我ほめをしいひちらし給へるものと哀なり。

★部を境に両本の間で異なりが確認される。場面は四の君との密通後、恋煩う宰相中将を見舞う女中納言の姿を語る。その悩みの種を奇しくも言い当てられ、どきりとしたのか、宰相中将は顔が赤らむ思いがしたけれどこれを堪

え、女中納言のからかいに笑つて応える。これが初雁文庫本の叙述である。これに対し、阪大本では宰相中将は顔が赤らむ思いがしたけれど、「これにぞうち思ひよりにけると我ぼめを」する。文意が前後の叙述に馴染んでいない。解釈上の問題がここにはあると言わねばなるまい。これと同様な行文であるのは異本系統第一種の伝本と、第二種の伝本・早稲田本に加え、国文研長谷本がある。いずれも阪大本と同じく行文途中にこの解釈上の不審が見られる。ちなみに、「うち」以降の本文は四丁ほど離れた丁面途中にある。どうやらこの不審は目移りに起因するものではなく、親本あるいはそれ以前の段階で生じた綴じ誤りに因る瑕疵が継承されたものであるようだ。こうした損傷を異本系統の伝本群との間で阪大本は共有している。それだけに異本系統本、その再吟味におよぶさい、阪大本もまたその検討の組上にのぼせる必要がある。

ちなみに阪大本と国文研長谷本は、その行取り・字配りがきわめて高いレベルで一致することを確認している。

○ 阪大本・一五丁ウ

へたてはみなありてとくるかたなきもふかくはいかてか  
しる人あらんいと人目に見えていまめかしくまろはれ  
給ふことはことになくたゝあてやかにめやすきほどの  
御なからひに見ゆるはかはかりあかぬ事もなき御あり  
さまを幾千代かさぬともあくましきをおもふほと  
よりはと見ゆれと男君はまたいとわかくものし給へは  
さこそはすくし給へとものつゝましくおほさるゝなめり

なとつみもなくことはりてもてかしつき給ふさま世に  
たくひなしましたけさうかましくゆきたはふれにたる  
けしきはたゆめにもなくおほ殿うちの御あそひなど  
よりはことなるよかれなともし給はぬをたゝ月毎に

○ 国文研長谷本・一五丁ウ

へたてはみなありてとくるかたなきもふかくはいかてか  
しる人あらんいと人目に見えていまめかしくまろはれ  
給ふ事はことになくたゝあてやかにめやすきほどの  
御なからひに見ゆるはかはかりあかぬ事もなき御あり  
さまを幾千代かさぬともあくましきをおもふほと  
よりはと見ゆれと男君はまたいとわかくものし給へは  
さこそはすくし給へともものつゝましくおほさるゝなめり  
なとつみもなくことはりてもてかしつき給ふさまよに  
たくひなしましたけさうかましくゆきたはふれにたる  
けしきはたゆめにもなくおほ殿うちの御あそひなど  
よりはことなるよかれなともし給はぬをたゝ月毎に

いま両本の本文を原本の表記を尊重して示した。傍線部のような仮名と漢字の表記差はたしかにある。しかしなが

ら、行取り・字配りの一致度、その高さもたしかである。これに加えてその筆跡も酷似し、行文途中の不審改行点も重なるところがある(阪大本・第一冊・八丁ウ、一一丁ウ、一二丁ウ／国文研長谷本・第一冊・八丁ウ、一一丁ウ、一二丁ウ)。ただし阪大本になく、国文研長谷本にはある行文途中の改行例も存在する(国文研長谷本・第一冊・一〇丁ウ)。阪大本の実相、その分析に国文研長谷本は重要な役割を果たすように思われるが、両者の違いにも留意が必要である。

異本系統本との重なりが指摘される、推定される伝本はその数が少ない。そのうえ、異本系統本の本文を簡便に確認できる資料はこれまでなかった。そのため異本系統の伝本、その検討・検証は紙焼き写真を入手している者か、原本調査を行った者らを除いて容易でなかった。こうした研究状況を承け、本稿では異本系統本との近さが窺われる阪大本の紹介とその本文の提供をつうじ、『とりかへばや』の本文資料の拡充を図る。なお、本稿を第一回とし、卷一以降については連載(全五回)予定である。

## 【注】

- (1) 西本寮子「写本で伝わる物語 後期物語と『とりかへばや』」(国文学研究資料館編『古典籍研究ガイドランス 王朝文学をよむために』笠間書院、平成二五年・第二版)。
- (2) 『とりかへばや』諸本分類については、いくつかの説がある。ここでは新居和美「『とりかへばや』諸本分類考——『改作本系統』の位置づけについて——」(『中古文学』七八号、平成一八年二月)にて示された、最も新しい諸本分類に従った。
- (3) 千葉直人「『とりかへばや』伝本系統試論——第四種本を中心として——」(『國學院雑誌』一二四卷九号、令和五年九月)。
- (4) 新居和美「『とりかへばや』異本系統派生の想定——長谷章久博士旧蔵本の紹介をかねて——」(『古代中世国文学』二四号、平成二

○年三月)。

(5) 本文は、国文学研究資料館「国書データベース」公開の原本画像に拠る (<https://doi.org/10.20730/200003519org/10.20730/200003519> 最終アクセス:2025年4月24日)。以下、国文学研究資料館に蔵せられている伝本は、いずれも同データベースに拠って確認した。

(6) ただし、異本系統第一種本と国文研長谷本が共有する独自異文「(いみしく心やましき)事とあはめ給へど何とこたへんかたもなく只涙にぞせきあへずさはいへ(女君の御袖くちすそのつままでてになまめかしく)」(六〇丁ウ)を阪大本は有しない。第一種本との近さが疑われるも、それとの違いも存在していることから、ここでは阪大本の位置づけを安易に言明しない。

[附記1] 原本閲覧および翻刻掲載のご高配を賜った大阪大学附属図書館および大阪大学外国文学館に衷心より御礼申しあげる。

[附記2] 本稿は、JSPS 科研費 (24K22491) の助成を受けた研究成果の一部である。

## 凡例

○ 本稿は、大阪大学外国文学館蔵「とりかへはやの物語 一の巻」[340=123=1(～5)](以下、阪大本)を翻刻するものである。礎稿は小林が作成し、これの再検討を新開が行い、最終確認を両者で実施した。なお本稿の文責は、すべて小林が負うものである。

○ 便に供するため、『新編日本古典文学全集』の見出し番号を掲げ、そのブロック毎に本文を示した。なお見出し範囲の末尾に阪大本の丁数と、そのオモテとウラを明記した(例:○○丁オー××丁ウ/△△丁オ)。

○ 各見出し一文目と和歌は改行して掲げたが、そのほかは原本どおりの行取りでなく、追い込み書きで記した。ただし原本での行取りが分かるよう改行位置は「〱」で表示した。なお和歌・結句での改行はこれを記さなかった。

○ 当該本は清濁を区別した書写がなされている。しかしそれは厳密なものではない。そのため紹介に際し、いまこれを採らなかつた。

○ 親本またはそれ以前の段階で発生したと思しき錯簡のため叙述が前後する箇所がある。錯簡部の始めと終わりに破線・波線・二重傍線をそれぞれ付し、当該部の対応部がそれぞれどこ分かるように表示した。その叙述を本来の形へ戻しはしなかつたが、見出し番号については、これを正した。

○ 漢字は旧字体・異体字などの別は、これなるべく忠実に表示した。ただし、もとの字体が入力できない場合に、かぎり、これを通行の表記に改めた。

○ 損傷が明らかな本文であっても(ママ)などは付さず、これをそのまま表示した。

○ 「はい」や「こゝち」など、熟語の語義と仮名字母が一部一致するものは本行に平仮名を記し、字母をルビの括弧内に記し、これを表示した(例…「はい」<sup>(本)</sup>、「こゝち」<sup>(通)</sup>「すくせ」<sup>(世)</sup>など)。なお、字母ルビは通行の表記で示した。

○ 合点の類は省略したが、傍書・傍注はこれを本文とともに掲げた。なお頭注は見出し番号ごとにまとめて示した。施注本文と注解を掲げ、これらを改行して書写する場合は、その改行点を「」で表示した。施注本文が明示されていない事例については、該当する本文を私に掲げ、「施注本文」―頭注」の形式で示した。

(例1…○かへすくとりかへばやと／此詞をもて物語の名とせり)

(例2…「しはやく」―引哥／○須磨の浦のしはやくけぶり風をいたみおもはぬ方にたな引にけり)

(例3…「まやのあまり」―○東屋のまやのあまりの雨そ、き我たちぬれぬその戸ひらかせ／此哥をうたひて也)

【翻刻】第一冊

とりかへはやの物語 一の巻（外題）（表紙）

とりかへはやの物語 一の巻（内題）（扉）

【一】

いつの比にか権大納言にて大将かけ給へる人御かたち／身のさえ心もちひよりはしめて人から世のおほえも／なへて  
ならすものし給へはなに事かはあかぬ事／あるへき御身ならぬに人しれぬ御心のうちのもの／おもはしさそいとつき  
せさりける  
（1丁オ）

【二】

北の方ふた所ものし／給ふひとりは源宰相ときこえしか御むすめにものし／給ふ御心さしはいとしもすくれねと人よ  
りさきに／見そめ給ひてしかはおろかならず思ひきこえ給ふに／いと、よになく玉ひかるをとこ君さへ生れ給ひにし  
かは／またなくさりかたきものにおもひきこえ給へり今／ひと所は藤中納言ときこえしか御むすめにものし／給ふ此  
御はらにも姫君のいとうつくしけなる生れ給ひ／しかはさま／めつらしく思ふさまにおほしかしつく／事かきりな  
しうへたちの御有さまのいつれもいとしも／すくれ給はぬをおほすさまならす口をしき事に／おほしたりしかと今は  
此君たちのさま／うつ／くしうておひ出給ふにいつれの御方をもすてかたき／ものにおもひきこえ給ひていまはさ

る方におはし／つきにたるへし君たちの御かたちのいつれもすくれ／給へるさまた、おなしものとのみ見えてとりも  
たかへ／つへうものし給ふをおなし所ならましかはふよう／ならましを所／にておひ出給ふそいとよかりける／お  
ほかたはた、おなしものと見ゆる御かたちの中に／若君はあてにかほりけたくなまめかしきかたそひて／見え給ふ  
姫君ははな／とほこりに見てもあくよ／なくあたりにもこほれちるあいきやうなとそ今より／似るものなくもの  
し給ひける  
(1丁オ・2丁オ)

三

いつれもやう／おとなひ／給ふまゝ、に若君は浅ましうものはちをのみし給ひ／て女房などにたにすこし御まへとほ  
きには見え給ふ／事もなく御ち、殿をもうとくはつかしくのみおほして／やう／御ふみならはしさるへき事ともを  
しへきこえ／給へとおほしもかけすた、いとつかしとのみおほして／御帳のうちにのみうつもれ入りつ、繪かきひ  
ひな／あそひかひおほひなとしてあそひ給ふを殿はいと／浅ましき事におほしのたまひてつねにさいなみ給へは／は  
て／は涙をさへこほして浅ましうつ、ましとのみ／おほしつ、た、母うへ御めのとさらぬはむけにちひさき／わら  
はなどにそ見え給ふさらぬ女房などの御まへえも／まあれは御几帳にまつはれてはつかしいみしとのみ／おほしたる  
をいとめつらかなる事におほしなけく／又姫君は今よりいとさめなくてをさ／うちにも／ものし給はす<sup>外</sup>とのみ  
つとおはしてわかきめの子／なとわらはへ共とまり小弓などをのりもてあそひ給ひ／御いてゐにも人まゐりてふ  
みつくり笛ふきうた／うたひなとするにもはしり出給ひてもろともに人も／をしへきこえぬ琴笛のねもいみしう吹た  
てひきならし／給ふものうちすんしうたうたひなとし給ふをまゐり／給ふ殿上人かたちめなとそめてうつくしとき

こえつゝ、／かたへはおしへたて奉りて此御はらのを姫君と／きこえしはひか事なりけりなとそみなおもひあへる／殿の見あひ給へる折こそとりと、めてもかくし給へ／人々のまゐるには殿の御さうそくなとし給ふほと／まつはしり出給ひてかくなれあそひ給へと中／／えせいしきこえ給はねはたゞ若君とのみ思ひてけうし／うつくしみきこえあへるをさおもはせてのみのし／給ふ御心のうちそいと浅ましくかへす／／とりかへはや／とおほされける

(2丁オ～3丁ウ)

〔頭注〕

○かへす／／とりかへはやと／此詞をもて物語の名とせり

〔四〕

かくいひ／／てもをさなきほとは今／おのつからなとなくさめつゝ、さても有へしとをにもあまり／給へと猶おなしさまなるをこはいかゝすへきとよと／／ともになけかしきよりほかの事なかりけりさりと／／とし月すきはおほしすることもとのみまち給へるを／／をさ／／なほり給ふましく見はて給ふに猶いとめつら／／しう世にためしなき御こゝちぞし給ひけるかくて今は／／かろひたる御ありきもつきなきほと御よそほしさ／／なれは殿ひろくつくりて西ひんかしのたひにふた所／／の北の方をすませきこえて殿を玉のうてなに／／みかきとの、御いてにそせられけるこれにもろともに／／さしならひて心ゆく北の方のおはせぬは猶口をしき／／事なりかし十五日つゝ、うらやみなくかよひ給ふさん／／たちをも今はやかてきこえつけて若君姫君とそきこ／／ゆなる

(3丁ウ～4丁オ)

【五】

春のつれ／＼御ものいみにてのとやかなるひる／つかた姫君の御方にわたり給へれば御帳のうちにそ／さうのこと琴をしひやかにひきすまい給ふなる女房／などこ、かしこにむれあつ、碁すくろくなどうちて／いとつれ／＼けなり御帳おしやりてなどかくのみ／うもれてはさかりなる花のにほひも御らんせよかし／こうちなどもあまりいふせくものすさましけに思ひて／侍るとやかてゆかにおしか、りてゐる給へは御くしはたけに／七八寸はかりあまりたれは花す、きのほに出たる秋の／けしきおほえてすそつきのなよ／＼となひきか、り／つ、物かたりに扇をひろけたるなどこちたうひたる／ほとにはあらてこれこそなつかしかりけいにしへの／かくや姫もけちかくめてたきかたはかくしもやあらさり／けんと見給ふにつけては目もくれつ、ちかくより給ひて／こはいかてかくのみはなりはて給ふにかと涙をひと目／うけて御くしをかきやり給へはいとはつかしけに／おほし入たる御けしき元あせになりて御かほのいろは／こはいの咲いてたるやうににほひつ、泪もおちぬへく／見ゆる御まみのいと心くるしけなるにいと、我もこほれ／つつく／＼とこと／＼なく哀に見奉り給ふさるは／かたはらいたければつくろひけさうし給はねとわさとも／いとよくしたるいろあひ也御ひたひ髪もあせにまろ／かれてわさとひねりかけたるやうにこほれか、りつ、／らうたくあいきやうつきたり白くおひた、しうして／たるはいとけうとかりけりかくてこそ見るへかりと見ゆ／十二におはすれとかたなりにおくれたる所もなく人／からのそひやかにてなまめかしきさまそかきりなきや／さくらの御そのなよ、かなる二つはかりにえひそめのおり物の／うちきあはひにきは、しからぬを着なし／給へる人からにもてはやされて袖くちすそのつままで／をかしけなりいて浅ましや尼などにてひとへにその／かたのいとなみにてやかしつきもたましと見給ふも／口をししく涙にかきくらされ給ふ／

いかなりしむかしのつみと思ふにもこの世にいと、ものぞ悲しき

(4丁オ〜5丁ウ)

〔頭注〕

○御まみの／目つき也

○白くおひた、しう／けさうをあまりあつくしたるはけうとしと也

○そひやか／やせかたにたけたかき也

○この世に／子といふ事をかねたり

〔六〕

西のたひにわたり給ふに横笛のこゑすこく吹すまし／たなりそらにひゝきのほりてきこゆるに我こゝちも／そゝろしくめつらかなりこれもさなゝりときゝ給ふに／又こゝちもかきみたるやうなれとさりけなくもてなして／若君の御かたをのそき給へはうちかしこまりて笛は／さし置つさくら山吹などこれはいろ／＼なるに／もへきのおりものゝかりきぬえひそめのおりもゝの／さしぬき着てかほはいとふくらかに色あはひいみしう／きよらにてまみらう／＼しういつことなくあさやかに／にほひみちてあいきやうはさしぬきのすそまでこほれ／おちたるやうなり見まほしく目もとろかるゝまでを／うち見るにはおつる涙ものゝなけかしさもわすられて／うちゑまるゝ御さまをあないみしこれをもとの女にて／かしつきたてたらんにいかはかりめてたくうつくしからんと／むねつふれて御くしもこれは長きこそおとれたれ／すそなどは扇をひろけたらむやうにてたけに少し／はつれたるほとにこほれかゝれるやうたいかしらつき／など見ることにゑまれながらそ心のうちはくらさるゝや／いとたかき人の子ともなとあまたゐて暮すくろく／

うちはなやかに笑ひのゝしりまり小弓なとあそふも／いとさまことにめつらかなりあないみしのわさやさても／これはかくて有へき事かは今とはともかくもしなすへき／かたのなさも今更にせめて女にとりなすへきやうも／なかめりこれれもほうしになして人にましらはせず／後の世をつとめさせんこそよからめとおほすも／心くは又さしもあらしかはかりのすくせなり／ければ今すこしいひ所あることもこそまさらめほいの／ふかき道心ならぬものから皆いたつらにしながらやみ／なんかよしなさよなとおほしくたく世に似すつたなかり／けるすくせかなとかへすくおほししらるかやうの／君たちはおのつからしとけなくもあるをこれはいと／いみしく今よりはかくしくさえかしこくおほやけの／御うしろみにおひ出給ふ琴笛のねも天地をひゝ／かせ給へるさまいとめつらかなりときやううちしうた／うたひ詩なとすんし給へるこゑはさまことにをのゝ／えもくちぬへくふることわすれぬへし何事もさらに／あかぬ事なき御有さまをかくのみおほしみたるゝそ／いとほしかめり  
(5丁ウゝ7丁オ)

〔頭注〕

○まみ／目つき也

○さてもこれは／実は女君なれば也

〔七〕

かゝる御さえかたちすくれ給へる事／やうく世にきこえてうち春宮にもさはかりなに／ことにもすくれたなるを今まで殿上なともせさせす／ましらひせぬ事つきせすゆかしからせ給ひて大将／殿にもたひく御けしきあれといとゝむねつふれ／浅ましくかたはらいいたければいまたいとけなきさま／をそうしてとりいて給はぬをわらはすかためなら

／さしとするならんとてかうふりをさへおして給はらせて／とく／おとなひさせてまゐらすへきさまにのみたひ／御けしきあるにさへいかにきこえてまゐらせぬやう／あるへきならねはざりとはた、さらはあるにまかせて／あるはかりこれもさきの世のことならめはかゝるすちにても／おの／さてもものし給ふへきちきりこそはと／ひたふるにおほしなりてことしは御裳着御元服われ／と／いそき給ふ

(7丁オ―8丁オ)

### 〔頭注〕

○かうふりを／叙爵也

### 〔八〕

その日になりて此との、御しつらひよの／つねならすみかきたて、姫君わたし奉り給ひひん／かしのうへもわたり給へりおほとのに御こしはゆひ給ふ／うそ／しからぬはねちけたるとさすかにかたはらいたく／おほすなるへしか、る御事ともをきくよそ人は思ひ／よるへきことならねはた、若君姫君をおもひたかへ／き、ひかめたりけるとのみそ心えけるまれ／くはしく／しりたる人は又いかてかうちいつへきことのさまならねは／なへて世にしる人なきそいとよかりける若君の御ひき／いれはとの、御せうとの右大臣殿そし給ふ御あけまさり／のうつくしさはかねて思ひきこえし事なれといともて／はなれ世になきかたちのし給へるをひきいれのおと、の／めて奉り給ふさまことなり此おと、は姫君のかきり／そ四人もち給へりおほい君はうちの女御中の君は／春宮の女御三四の君はた、にておはするをなら／へて見まほしうおほすへしろくともおくり物など／さらに世になききよらをつくし給へりかうふりは／わらはよりえ給へりしかはたいふの君とそきこゆ

(8丁オ―ウ)

【九】

やかてその秋のつかさめしに侍従に成給ひぬ／みかと春宮をはしめ奉りてあめのしたのをとこ女／此君をひと目も見  
きこえてはあくよなくいみしき／ものに思ふへかめりおほしときめかせ給ふさまやん／ことなき人の御子といひな  
らいとたくひなきもこと／はりと見えて琴笛の音にもつくり出るふみの／かたにも哥の道にもはかなくひきわたす筆  
のあや／つりまで世にたくひなくうちふるまひしらひ給へる／さまのうつくしきかたちはさるものにて今よりある  
／へきさまにうへ／しく世のありさまおほやけこと／をさと知りたる事のさかしくすへてこと／に／此世のも  
のともあらぬを父大将もさはいか、せん／さるへきにこそといふかひなければ今はやう／かゝる／かたにつけても  
うれしくうつくしきことをのみ／おほしなくさみゆくを此君猶をさなきかりは／我身のいかなるなとまとられす  
かゝるたくひも／あるにこそはと心をやりて我心のまゝ、にもてなし／ふるまひすくしつるをやう／人の有さまを見  
／き、しりはてもの思ひしらるゝまゝ、にはいとあやしく／浅ましう思ひしられゆけとさりとて今はあらため／おもひ  
かへしてもすへきやうなけれはなとてめつらかに／人にたかひける身にかとうちひとりこたれつゝもの／なけかしき  
まゝに身をもておさめてものとう／もてしつめつゝ、ましらひ給へるよそひなるといゝとめて／たきをその時のみかと  
四十よはかりにていとめて／たくおはします春宮は廿七八にて御かたちなども／たゝ、わうけつ正きけたかくおはします  
か此いもうとの／君の御かたち名தாகくすくれてきこえ給へはいづれ／も御心をかけておほせ事あれとせんかたなき  
御／ものはちにことよせておほしもかけすけにさやう／にももてかしつきてあらましかはといみしき御物／おもひな  
り

(8丁ウ、10丁オ)

【10】

みかとはうせ給ひにし後の御はらに／女一の宮ひとりおはしますをあはれに心くるしき／事に御目はなたすもてかし  
つき奉らせ給ふさら／ては内春宮にもをとこのみこのおはしまさぬを／あめのしたの大事にてわれも／と御いのり  
ひま／なし右大臣殿の女御やんことなくてさふらひ給ふ／めれと一の人の御むすめならねは后にもえぬ給は／すみか  
とは此女一宮の御事を朝ゆふにうしろ／めたくおほしなきて此侍従のありさまの／この世のものとも見えすなりゆ  
くを此宮の御うし／ろみをせさせはやと御らんするたひことに御目と、／まるさはいへ御うしろみのはか／しから  
ぬけにや／またいとわかくあふなくおはしますをいもうとの君の／さはかりめてたかなるに見ならひてめさましき心  
もや／御らんせられんとまたいとのけなきほともすこし／もの／しきほとに見なしてなとそおほしめしける／か  
やうの御けしきをもりき、給ふにも殿はむねうち／さはきてあはれか、らさらましかはいかにめいほく／ありうれし  
からましと口をししく心うきものから／すこしほ、ゑまれてそき、給ふ侍従の君はいと心／かしこくかはかりのほとに  
も似すあるへかしくめて／たくうちわたりにも御かた／くの女房などとは見る／ことに心けさうせられて露のひとこと葉  
もいかて／かけられしかなと見えしらかひけりよからぬ身を／思ひしりなからありそめにける身をえもてかくし／や  
るかたなくてましらふにこそあれなにかは目の／とまらんとまめやかにてもておさめたるをさう／／しく口をし  
とおもふ人おほかり

(10丁オ～11丁ウ)

【11】

その比の／みかとの御をちに式部卿の宮ときこゆる人の御／ひとつ子の君此侍従の君にはふたつはかりのこのかみ／

にてかたち有さまいと侍従のほとにこそにははね／なへての人よりはこよなくすくれてあてにをかし／心はへたとしへなく、らぬくまなくこのましくなよひ／なまめかしくて思ひいたらぬかたなき心にてこの／との、姫君右のおと、の四の君さま／に名たかくいはれ／給ふをいつれをもいかでと思ふ心ふかくてさるへき／かたよりあなかにたつねよりつ、心のかきりかきつくし／いられわふれと人からのいとあたなるに露のことも／あなゆかしといつかたにもおほしはなれて返り事／する人もなきをわりなくなきつ、此侍従のあまり／いみしくものまめやかにみたる、所なくおさめたるを／こそあまりさう／しきやうなれとみるめかたちの／似るものなくあいきやうこほれてうつくしきさま／のか、る女のあらましかはと見るたひにいみしくおも／はしきをいもうともかくこそはものし給ふらめ女は／今一きはまさらんほと、思ひやるに見奉らてやむ／へきこ、ちもせすわひしきま、に此君をいとよく／かたらひて思ひあまる時は涙もつ、ますうれひ／泣かたらへるさまの人よりすくれて哀になまめき／たるをいとほしくあはれにこと人よりはなつかしく／うちかたらひなから我はいとうちとけむつひられす／うちいつることには人の御身のよつかさりける事のみ／しらる、にむねうちつふるれはいたくもあひしらはす／ことすくななるほとに心はつかしくのみもてなしたるを／ねたくうらめしと涙をもつ、ます思ひいられたる／けしきの心くるしさを見ることに／

侍従

とそこたへまほしけれと何事をさへ思ふそと問ひか、らんも／のかれ所なければ只なさけなくもてすくよかなる／さまにてそたち別れける

(11丁ウー12丁ウ)

# 〔頭注〕

○たとしへなく／是は表裏にたかひたる事也侍従の君とは心はへ異也といふ心也

【一二】

かゝるほとに／みかと御こ、ち例<sup>(地)</sup>ならて久しくなりぬるはさるへき／にこそはあらめいにしへもさるためしなくやはとおほ／して春宮に御位をゆつり給ひて女一の宮を／春宮にすゑ奉り給ひて我御身はすさく<sup>朱雀</sup>院に／おはします大殿も今は御とし七十におよひ／御やまひもおもくのみおほさるれば御くしおろし給ひて／この殿左大臣になり給ひてそ関白し給ふくきやう／つき／に成あかりてとの、侍従三位して中将に／なり給ひぬ

(12丁ウゝ13丁オ)

【一三】

右大臣との、女御后にる給はすなりぬる／をあかす口をしくおほして此中将の人からもいと／こよなくまさりていさゝかあた／しくかろひたるふる／まひなとすともきこえぬにます事あるへきなら／ねは四の君をそれにおほしきためて父おと、にも／きこえ給へはをかしとおほしなからなにかはいかにいひ／てかあるましきこと、はものせんとおほしていかなるにか／かやうによつきたる心はゆめにも侍らさめるはさりと／まめやかなるかたはかりはいとよく人に御かむせらる／へきものに侍らめとうけひき申給ひつ北の方にかくなんと／のたまふにこめかし／からむ人のむすめのあやし／なんと思ひとかめいふへきならずた、うちかたらひて人目／をよのつねにもてなしていていらせましようち笑ひて／よきうしろみなりとのたまふまたいとわかくおはすれば／うしろめたかりぬへけれとあふなくはまたおはすへくも／あらぬさまなれば心やすくて御ふみか、せ奉り給ふなに／こともおほしわかすをのことものなかにもこのもしく／のみき、ならひ給へればけさうのかたにこそはとて／

<sup>中将</sup>これやさはいかてしけきは道ならむ山くちしるくまとはるゝかな

とかき給へるえもいはすめてたき<sup>(見)</sup>みのなり御としの／ほとおほすにいかてか、りけんとをかくもあはれに／も涙くまれ給ふ右のおと、にはからうしていひおもむけ／給へる事なれば御返りことそ、のかしてか、せ奉り給ふ／

<sup>四の君</sup>ふもとよりいかなる道にまとふらんゆくゑもしらすをちこちの山

かくて後は常にきこえ給へはわれす、み給ひにしことなれば／その日とおほしたちになりいとやんことなき<sup>(本)</sup>ほいおはする／人にてすくれてかしつききこえ給ふ御むすめのこと／との、三位の中將をとりよせ給ふ御けしきありさま／  
なにも事なものによろしからんやは  
(13丁オー14丁ウ)

#### 【一四】

其比の大納言なく／なりたれはしたいに成のほりて権中納言にて左衛門督／かけ給ひついと、はなやかにめてたしともおろかなり式部／卿の中將もかけなく宰相になり給ひぬれとかた／つく／しつる心のひとかたはかくし<sup>引哥</sup>はやくけふりにき、なしつる／ことをよろこひもなにも思はぬかほにゆきあふ折／は／すこし心をくけしきになけしめたるを中納言は／なそやかく思ひ入たる人をかひ／しく見たまはてと／をかくし思ひ給ひけり (14丁ウー15丁オ)

#### 【頭注】

「しはやくけふり」——引哥／○須磨の浦のしはやくけふり風をいたみおもはぬ方にたな引にけり

#### 【一五】

中納言は十六女君は十九にそ／おはすれはかたちも心もかたなりなる所なくよきほとに／としよりはしめあかぬ所な

くめてたくてあね君たち／よりもこよなくをやたちのおほしかしつきつるわか／心おこりも人しれすかみなき位にも  
およふへき身と／おほしつるにこよなくあさはかなるこゝちするをけしき／にこそ出し給はねとかくやはものをと心  
のうちにはうち／なけれなからもたゝ人からのいとをかしくすくれて／うとましきもてなしもなかつたゝいとあはれ  
けにうち／かたらひつゝ、見なるゝまゝには思ひもおとされ給はさりけり／よるの衣も人目にはうちかはしなからかた  
みにひとへの／へたてはみなありてとくるかたなきもふかくはいかてか／しる人あらんいと人目に見えていまめかし  
くまろはれ／給ふことはことになくたゝあてやかにめやすきほどの／御なからひに見ゆるはかはかりあかぬ事もなき  
御あり／さまを幾千代かさぬともあくましきをおもふほと／よりはと見ゆれと男君はまたいとわかくものし給へは／  
さこそはすくし給へともものつゝ、ましくおほさるゝなめり／なとつみもなくことはりてもてかしつき給ふさま世に／た  
くひなしまたけさうかましくゆきたはふれにたる／けしきはたゆめにもなくおほ殿うちの御あそひなど／よりはこと  
なるよかれなともし給はぬをたゝ月毎に／四五日そあやしく所せきやまひの人に見えつくろふ／へきにあらぬをも  
のゝけにおこる折／の侍れはとて／御めのとの国にはひかくれておはすそいかなる事そと／心おかるゝふしには有  
ける

(15丁オ―16丁オ)

### 〔頭注〕

- かみなきくらゐ／后にもといふ事也  
○所せきやまひの／実は女君なれば月のさはり也

【一六】

九月十五日月いとあかきに／御あそひにさふらひて御とのみなる夜梅つほの女御の／まうのほり給ふをわざとゆかし  
くはあらねと藤つほへ／とほるへいのわたりに立かくれて見れは更ぬる月の／くまなくすめるにひとりもたるわらは  
のこきあこめに／うすものゝかきみなめりすきとほりたるにかみいとをかし／かゝりてあゆみ出たり女房もみなか  
うちたるきぬに／うすものゝからきぬぬきかけたりた、今のそらおほえて／おかしく見ゆるに女御は御几帳うるはし  
くさして／いみしくもてなしかしつかれ給ふさまのこゝろにくゝ／めてたきをあはれ我もよのつねに身をも心をも／  
もたらましかはかならずかくてそおりのほらましあな／いみしひたおもてにて身をあらぬさまにましらひ／ありくは  
うつゝの事にはあらずかしと思ひつゝくる／にかきくらさるゝ心地して／

中納言  
月ならはかくてすままし雲の上をあはれいかなるちきりなるらん

われこそちきりつたなくてかゝらめ姫君たよのつねにて／かやうのましらひし給はましをあかぬ事にてなるゝまゝ、  
／に身をなけてもひとりはやのつねにておはすと見て／こそはかやうのおりのほりのかしつきもせましなど我身／  
ひとつのことを思ひつゝくるにこれよりいてゝやかて／ふかき山に跡たへなまほしくおほゆるまゝにとはかり／見送  
られてありつるひとりことを思ひつゝくるほとに／ほとらひとつの月と聲は似るものなくすみのほりたるを／宰相の  
中将もこよひの御あそひにさふらひてたゝ今は／たゝひとかたに大とのゝ姫君の御事を思ひこかれて／例のかひなく  
とも此中納言にうらみもまたよになきかたち／けはひも見まほしきにもなくさめんと思ひてまかて給はす／なりぬる  
をいつくのくまにはひかくれて見へぬならんと／うかゝひありきけるに此聲をきゝまとい尋ね来て／見れはおりも  
のゝなほしさしぬきにくれなぬのつやの／こほるはかりなるをぬきかけていとさゝやかに見ゆれと／わかくをかしけ

にて月かけにひかるはかりめてたく見えて／つねよりもうちしめりたるもてなしけしき袖ぬれ／わたるに例のしめたるにも似すよになきかほりなるを／をのこの身にたにめてたく見ゆるをまいて此人の「こと」もかけよらんをき、しのひにけん人はあらしかしとすら／やましくわか身はつかしけれとひきと、めてわりなき／事をうらみいふもいとゑんにをかしうなまめきたるは／いとにくからず

(16丁オ―17丁ウ)

### 〔頭注〕

○ひとりこと／是は前の月ならはの哥也夫々とうの月まで打すんし給へる也

### 〔一七〕

人はいかにもすへて身にならはしそめ／かたらひなとせすいとあまりものとほくのみもてすくる／心にも此人はかりはさしはなちかたう哀なれはかうのみ／のたまふをなへてことよき御月くさのうつりやすさは／うしろめたけれと心くるしう思ひきこえさする折／侍れとみつからの心にまかすへきかたなきことにて／た、かくのみうけ給はるこそかひなくいとほしけれとうち／なきて身を思ひしりつるなこりいたくなかめいる／けしきかはかり思ふ事なける身に何のあかぬ／こと、よと、もになけかしきならんあまりことさらひ／まめやかなるもいみしう思ふ事のあるなめり見る／人とてもあかぬ事ありとはきかぬをつねのことにそれ／をはめならしていかはかりの事のかくはおほゆるならん／この比の春宮などの御事かそれも此人の御身にはいと／いみしう有かたかるへきならすいたくつ、むことある人の／ことの外に哀なるかなとおしはかりけしきとりてよろつに／とりなしいひおほさむ事は身にかへてもたはかりけしき／とりてかなへ奉りてん深くへたて給へるこそとすらむるに／こたへんかたもなければ我身にとりてきこえ

あはせたらん／にしかやすかりぬへき御心なめりとうち笑ひて／

中納言

そのこと、思ふならねと月見れはいつまでのみかものは悲しき

こたへたる声もいみしうにほひありなつかしうおほ／ゆるにいまめかしきくせはほろ／と泣れて／

宰相中将

そよやその常なるましき世中にかくのものを思ひわらん

いとつみ深くのみ思ひしられ侍れは此御けしき見はて、／ふかき山に跡を絶なと思ふとかたらへはそはしもさ／おほしたらん時はおくらかし給ふなよいかてかくて世には／あらしとそ、ろにおほゆる心のとし月にそへてもまさり／侍れとさすかにえこそ思ひたち侍らねと哀にうち／かたらひあかしておの／／まかて、も此中納言よろつ／めてたくすくれたる中にもけちえんにこまやかなるけはひ／などの女にていみしう見まほしうをかしうもあるかなと／戀しきにそいと、いもうとの姫君は思ひやられける

(17丁ウ―19丁オ)

## 二八

かく心をつくし思ひまとへとかけてもなすらひにき、／いるへきけしきならぬをいかにせんとおもひわふるに／院のうへ春宮を今は立はなれてちかくもえ見奉らせ／給はぬを御めのとなといひてもはか／しくも心はせ／ある人もさふらはす我御身つからはいとものはかなく／いとけなくのみおはしますをうしろめたくおほつかなく／おほしなけきこえさせ給ひて此大殿の姫君むこ／とりうちまゐりのかたは思ひ絶てきこしめすを此／御うしろみにせはやとおほしなりてまゐり給へるに／御物語などこまやかにきこえ給ふつゐてに中納言の／いもうとはいかにしなさんと思ひおきてられたるそと／とはせ給ふ例の猶御けしきあるかとむねつふれて／いかにも／思ひ給へすをやと申せと浅まし

ううとく／はつかしきものに思ひて見え侍れはあせになりてこゝち／さへたかへたる人なれば尼などになしてそのかたにおも／むけてやみなましとのみなん思ふ給へなりにとて／うち泣給ひぬるをけに世をのかれんとはあらざり／けりと哀に御らんしてそれいとあるましき事なり／春宮はかゝしき人なくおのれを立はなれていと心／くるしきをその君御あそひかたきにまゐらせ給へ／世中にとまかくもあらは后にはゐ給ひなんとおほせら／らるゝに中納言の事おほし出られてこれもさるへき／やうこそあらめとうれしくもめつらかにもさま／御心／みたれてけにさほとのましらひはつかうまつりもや／せんとて母なる人にのたまひあはせんとてまかて給ひぬ／うへにかくなときこえ給へはいさやいかなるへき事にか／と思ひさためられてなんとこのたまへは中納言の／有さまを見ればこれもかうさまにてよかるへきにもや／あらん仰事たかへすけに後の位にさたまり給ふやうも／ありなん思ひの外にめてたき事にてこそはあらめと／おほせはあらまし事にもむねうちさはき給ふや／御いのりさま／にせらるおなしくはとくとおほせらる／れは十一月十日比にまいらせ奉り給ふなにかは／あかぬことあらん女房四十人わらはしもつかへ八人めてたく／たゝかしつきたてゝまゐらせ給ふによのつねなるへき／御ましらひにもあらぬにその事となくてさふらひ／給はんもそゝるなれば内侍の督になりてそまゐり給ひ／ける

(19丁オ―21丁オ)

### 〔頭注〕

○御身つか／春宮也

○まゐり給へるに／左大臣のまゐり給へる也

○御あそひかたき／御あそひ相手といふ事也

○うへに／北の方也

【一九】

春宮はなし壺におはしませは御つほねはせん／宣／耀／殿／ようてんにせられたりしはしはよる／のほりてひとつ／御帳に御とのこもるに宮の御けはひ手あたりいとわかく／あてにおほとかにおはしますをさこそいみしうもの／はちしつ、ましき御心なれと何心なくうちとけたる／御らうたけさにはいとしのひかたくてよる／御とのゐ／のほといか、さしすき給ひけん宮はいとあさましう／思ひの外におほさるれとみるめ見のけはひはいさ、か／うとましけもなく世になくをかしけにたを／と／ある人さまなれはさるやうこそはとひとへによりき御あそひ／かたきとおほしまとはしたるよになくあはれにそ／おほえ給ひけりひるなともやかてうへの御つほねにさふらひ／給ひて手ならひ絵かき琴ひきなど起ふしもろとも／に見奉るによろつつ、ましくはつかしきものとうつ／もれしほとにつれ／よりは何事もまきる、こ、ち(地)／し給ふ今とてもわつらはしき思ひあるましきならね／は宮の宰相もはなれす中／さひしきまとの内に／こもり給へりしほとこそ思ひをはこふかたなかりしか／中／か、るかたにたち出給へるはいとうれしくて／よるひるせんようてんのわたりをはなれすおほかたの／けしきをも見るにけたかうもてなしたるさまおほかたの／おほえよにもいみしきをいかならん世に我おもひ／かなへんとのみぞ思ひける

(21丁オ～22丁オ)

【頭注】

○さしすき給ひけん／内侍実は男君なれはけさうたち給ひし也

○うへの／春宮也

その年の五節に中院の／行幸ありければみな人々を小思み奉る中に宰相中将／權中納言の青すりいと、いみしう見ゆ宰相  
はいと／そゝろかにを、しくあさやかなるさましてなまめかしう／よしあり色めきたるけしきいとをかしう見ゆ中納  
言は／はな／と見れとも／あくましうにははしくこほる／はかりのあいきやう似るものなきにもてなし有さまも  
／さはいへとなこやかにたを／といとなつかしきほとの人によなくすくて目もあやなるを御かたの人々／を  
かしと見るに宮の宰相はいさ、かも人のけはひする／所はた、にも過すかならすたちとまりものなといふを／中納言  
は見みるめにたかひて宰相のゆきもやらすと、／こほりかちなるをしりめに見おこせつ、すきぬるを／桧のくま川なら  
はしはし水かへともうちいてつへく／みな見おくらる、中にもしみていみしと思ふ人あり／けりみするしんのたちお  
くれてまゐれる申へき事／ありかほにけしきはみてさふらへは何事そとはせ／給へはれいけい殿の細との、一のく  
ちにうちまねき／と、めてまゐらせよと侍りつるといみしうえんなる／ふみとりいてたりあなおほえなとて見給へ  
は／

あふ事女はなへてかた木のすり衣かりめに見るそしつ心なき

といとをかしけなるをあやし誰ならんとうちほゝゑまれて／さはかしければ返り事もせずなさけなくいとほしきに事  
／はて、皆人もしつまりぬるに夜ふかき月のいとあかう／すめるにれいけいてんのほそとのをとかくた、すみて／

中納言  
あふことはまた遠山のすりめにもしつ心なく見けるたれなり

とうそふくに人声もせず人もなきにやと思ふにふみ／いたしつる一のくちに／  
めつらしと見つる心はまかはねとなにならぬ身のなのりやはせし

とこたへたるけしきもなへてならすをかしかなり立よりて／

中納言  
名のらすは誰としりてか朝くらやこのよのまにもちきりかはさん

こやかた木のすり衣なりけるなとそこはかとなくいひすさむ／けはひのちかまさりはたなつかしういみしくあいきやう／つきたるをいと、心にしみてをかしと思ふにのとやかに／たち給へるいか、あらんといとつ、ましさいやましければ／よのつねにみたれいりなとすへきさまあらず女も女御の／御おとうとやうの人なるへしなへてのけしきならずと／見らるれはなさけなからぬほとにかたらひて人々の来る／音すれはうち忍ひてたちあかれぬかやうにひと目も見る／人の心をつけてまちおほさん所も人のき、つたへん事も／しらすきこえこちかくるあまたあれと人のほとかららか／ならすいとをかしかりぬへきはなさけなからぬほとに折く／いひかはしさらぬかきませのほとはしらすかほにてき、／すこしいとこよなく物とほくもおさめ給へるを玉の／きすとあかぬ事に思ふ人々あり此宰相のあまり／すくさす尋ねよりいひか、りうか、ひありくをおかしと／思ふ人多かりけり

(22丁オ～24丁オ)

### 〔頭注〕

「桧のくま川」―引哥／さひのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへかけをたに見ん

「かた木のすり衣」―○かた木は衣をする型木也それを難きにいひかけたなり

### 〔二〕

その年たちかはりついたち比霞める／空は春のけしきとのみ見えなからまたふる年に／かよふ雪うち、りおかしきほとにせんえうてんに大との／まゐり給へれは中納言さふらひ給ひけりさとの御すまひにて／はいにしへはうへたちの

御いとみ心のなこりことの外にうと／＼しかりしかと此ふた所のほかには又たくひも／なし我世もしらぬをよつかぬ有さまをもこと人にいひ／あはせ給はんよりはかたみにうちかたらひつゝはすくし／給はめといひしらせつゝおの／＼をよすけ給ひしより／みすのうちはいれ給ひしかとことの外の御物はちに／もやのうちのみすのへたては猶あつかりしをうちに／まゐり給ひてはおりのほりの御かしつきのほとにけち／かくならひかんの君も世をおほししりやう／＼おもなれ／ゆく心にや今はた几帳はかりのへたてにてもなと／いとなつかしうきこえ給ふ世に似すをかしき御けはひ／などを我身はさるものにいひ置て此御有さまを／たに例の人と見奉らはやとあかす悲しうおほす／かんの君も此御ありさまを見るたひことにむねうちつふれ／てかたみにおほしみたるゝ心のうちともおのつからさる／へきほとゝいひなからうとからす哀もふかりけり御／しつらひはこうはいのおり物の御帳御きは見えなる／女房などは梅の五つ重をひとへうちかさねつゝ、こう梅の／おりものゝからきぬもへきのみはの色あひもよにつくし／てかすもなくなみさふらふに中納言むらさきのおり物の／さしぬきくれなゐのいろ深くつやこほるはかりなるを／いたしてさやかにつゐる給へるかたちのつねよりもはな／＼とあたりにこほるゝあいきやうみまほしくなつかしけなる／こといとたくひなきを例のよとゝもにむねあくよなき／とのゝ御心のうちなれと見るにはうちあまれて物思ひも／わするゝ心地して御帳のうちをさしのそき給へれば／紅梅のうすくうへにほひたる御そともにこきかい／ねりさくらのおり物のこうちき紅梅かさねの御扇を／もてまきらはし給へる御かたち中納言の御かほの／にほひをうつしとりたらんほとに見わきかたきまで／かよひ給へれとこれは今すこしあてにかほりなまめき／たる所やこよなくをかしからん御くしはつや／＼とまよふ／すちなくゆるらかにかゝりてたけに二尺はかりあまり／給へるすゑつきの白き御そにけさやかにもてはやされ／たるなどいづくともなく絵にかきたるほとなるを見る／ことにあないみしとむねうちふたかり

て此御有さまの／よろしやかにあかぬ所あらましかはさはれや尼法師に／なしてふかき山に跡たえ給はんこともあらしき思ひ／はうすくやあらましかくすくれ給へる御さまともに／つけてはうれはしうも悲しくもかた／もろき泪そ／こほる、  
(24丁オ～26丁オ)

〔頭注〕

○うへたちの／母君たち也

○例の人と／実は男なれば則男にて見奉らはやといふ心也

○御きは見へなる／御側つかへ也

「よろしやかに」——○此よろしやかと云は一通りならはと云意也

〔三三〕

くれて月いとあかきに御琴の音はいかゝなり／たる中納言の笛のねにあはせてうけ給はらんとてさうの／御琴そゝのかしきこえ給ひて中納言に横笛奉り給ふ／例のすみのほりをかしけなるねのはるかに雲井を／わけてひゝきのほるやうにおもしろういみしきを涙／とゝめかたきにかきあはせ給へる御ことのねおとらす／かきりなきをあたりもさらぬ宮の宰相立き、けるに／笛のねもことの音もいみしの事や此世のものならぬ／いもせの御さえともかなかたち有さまもかくこそはあらめ／ときくにそゝろに泪こはれてしのふへくもあらねと／まやのあまりをうちうそふきてそりはしのかたに立／いてたれば中納言ひはを笛にとりかへておしひらきて／きませとかきならしたなりとはかり帳ならぬこそわひし／けれとて心ときめきせらるれとおとゝのうと／しき／さましてゐる給ひぬれはかひなく口をしょうてい

と／すぐよかになりぬこと殿上人かんたちめなとまりて／御たいめんあるにも宰相は有つる御琴のねのみ耳に／つきてさはかり何事にもよのひとつものなる中納言の／めうつしにはいかはかりならん事の御耳にもと、まり／なんと思ふにいとねたく口をしようて琵琶奉り給ふを／わりなくすまひ給ふ女房など中納言殿にこそひとし／からねなへての人にはこよなくすぐれたるをいと／なつかしうをかしと見けり  
(26丁オ―27丁オ)

〔頭注〕

「まやのあまり」――○東屋のまやのあまりの雨そ、き我たちぬれぬその戸ひらかせ／此哥をうたひて也

〔二三〕

おなしみかきのうちに／なりては時さかやうのことのねをきくにも岩うつ浪／のとのみ思ふことのかなふへきよはなけなるを思ひわひて／霞わたれる月のけしきにも心のみそらにあくかれ／にたるをなめわひて例の中納言殿にかたらひてなく／さめんとおほしてさきなどもこと／しうもおはせず／しのひやかにておはしたれば例ならすしめやかにて／うちの御とのゐにまゐらせ給ひぬといふかかひなくち／をしうちへやまゐらましとなかむるにさうの琴／の音ほのかにきこえたるにきと耳とまりてさならん／かしと思ふにこれも浅からす心をみたし、人の／しほやくけふりに成にしそかしと思ふに今とても／おもひはなたぬ心はむねうちさはきてとかくまきれ／よりてかいはめははしちかくすたれをまきあけて／ひきいてたるねをきくよりも月かけにいと身もなく／きぬかちにてあゑかにうつくしうなまめきたるさま／内侍の督ときこゆともかきりあればこれにはいか、／まさり給はんとするすぐれたる名は高けれといとかくは／思はさりしをまことにいみしうもありけるかなと思ふに／又たましひ一つは此人の袖のうちに入ぬる

心地して／見すきてたち帰るへきこ、ちもせずつしこ、ろも／なくなりにければさはこよひいなりと思ふに夜更  
れは／人／＼はとかくよりふしあるは庭において花のかけに／あそひなとしてまへには人もなきに琴のうへにかたふ  
き／かゝりてつく／＼と月をなかつて／

中納言方  
春の夜も見るわれからの月なれは心つくしのかけと成けり

とひとりこちたる父は、とてもあまたの中にすくれたる／思ひかきりなかり見る人とてもさはかりめてたくすくれ  
／てゆきわつらふ所もなくいとあまりよつかぬまでまめ／やかなるを何事の心つくしなるにかときくにいよ／す  
くしかたく成まさりておしあけてつ、ますあゆみ／入給ふを人／＼中納言のおはするとおもひておとろ／かぬにふと  
よりて／

宰相  
わすられぬ心や月にかよふらん心つくしのかけと見けるは

けはひのあらぬに浅ましとあきれてかほを引いれ給ふ／をかきいたきて帳のうちにゐて入ぬやおほゆる／やうにし  
給ふをまへ近き御めの子の左衛門といふ人／き、つけてとの、おはしまあつると思ひつるをいかなれは／とおとろ  
きてよりたるにいひやるかたなくいみしき御けし／きなるにしのひやかに泣給ふけはひなるをあな心うや／いとつら  
くおほしすてしかとしふねき心にかれぬ／御ちきりはかゝるにもありけるそかしいかにおほすとも／今はかひ有へ  
きことかはた、さりけなくてをとし／らへ給ふにその人なりけりときくも浅ましういみし／けれともけにいふかひ  
なければ人にたにしらせしと／思ひて御まへにはいらせ給ひぬなりまろは御まへに／さふらはん月をも花をもよく見  
あかし給へといえはわかき／人／＼あはれしれんにこそといひなからあそひいてぬ／めり女君は中納言にならひて人  
はた、のとやかに／はつかしううちかたらふことより外にはなきものとのみ／おほすにいとおしたちなさけなきもて

なしなるに絶いり／ぬはかり泣しつむけはひ有さまのかきりなくあはれに／らうたけなるにかくて後も心やすくあひ見さらん事の／わりなきに猶中納言はあやしかりける人かないみしう／まめなるは此人に心さしのたくひなきとのみ思ひ／しをさまことなりけるひしり心にこそ有けれとめつらか／にもさま／おほゆ  
(27丁オ―29丁ウ)

### 〔頭注〕

「岩うつ浪」―引哥／○風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけてものを思ふ比かな

○さならんかし／中納言の北の方ならんと思ふ也

「しほやくけふり」―引哥／○須磨の浦の塩やくけふり風をいたみおもはぬかたにたな引にけり

○かいはめ／垣間見也

○見る人とても／中納言の事也

「月をも花をも」―引哥／○あたら夜の月と花とをおなしくはあはれしられん人に見せはや

○ひしり心／北の方のいまた男にあひ給はさりしをいふ也

### 〔二四〕

あふ人にしもあらぬ夜をまいてはか／なう明ぬなり左衛門いられわふれはいてぬへきこ、ちも<sup>(地)</sup>／せねとさりとてあるへきならねはなく／心のかきり／たのめちきりていて給ふこ、ち夢のやうなり／

幸相  
わか為はえにふかけれはみつ瀬川のちのあふせも誰か尋ん

猶おほししらぬこそかひなけれといへといらへもせず左衛門に／いみしきこと、もかたらひてたちかへりても夢かと

／たにえ思ひわかすよ、となかれぬ女君はまして浅ま／しううつ、ともおほえぬ心まとひにきえいるこ、ち／してお  
きもあかり給はねは御心地のわひしきにやなと／人々見奉りあつかふに中納言うちよりまて給ひて／いり給へるに  
いと、いかて見え奉らんとわひしきま、に／ひきかつき給へるをなとかくはと問ひ給へは御まへなる人／よるより例  
ならすおはしましてなるときこゆれはいと／ほしく心くるしうおほしてそひふし給ひていかにおほ／さるゝそ今まで  
御せうそのなかりけるよなといとなこやか／にあてはかに見あつかひ給ふにつけてもいと、めつらか／なりつるけ  
しきはふと思ひ出られてむねふたかりぬ／

(29丁ウゝ30丁ウ)

## 二五

うへもいかなる御こ、ちなとおほしさはきてまつり／はらへなにやかやとさはかしけなれは中納言もたち出／給はす  
そひみ給へは左衛門かもとに立かへりひまなき／御ふみをたに見せ奉らす跡たへたるまゝに宰相の君は／月比の物思  
ひにいよ／かさねつる心地してわひしく／たへかたくかくてはいきめくるへきこ、ちもせずとし比／もの、いとか  
くおほえましかは今までいきめくらましや／はとおほえてこれかれまとへとすへきやうもなし左衛門か／もとには日  
に千たひみくらの山の所なきまでかきつくし／給ふをわかやかにもの深からぬこ、ちにはえもいはす／あてになまめ  
きたるけしきしていのちも絶ぬはかり／泣わひ給ひしあかつきをいと浅からす心くるしと／見奉りにし心のしみにし  
かは御ふみのひまなきことの／はなと哀に悲しけなるもいとほしくはなちかたく／色めきたる心には思へれはいと夢  
のやうなる事ののち／そのまゝにいみしくおほしいらせ給ひて御こ、ち例／ならすものし給へはとの、ひまなくそひ  
おはしてかひ／なきまでもえ此御ふみをひきいてぬよしをおなし／さまにかきおこすけにさもあらんかしときえいり

ぬはかり／なりしけしきも思ひ出るにうらめしさもわすられて／戀しく悲しきにわれもおきあかりありきせんことも  
／おほえすつく／とおきふしなけきわひつゝは／さても中納言の浅からす見えなからいかなりける事／そとよ有し  
よのほともこそ中納言も泣しつむらめ／おほかたの人からはいとめてたく目もあやにすくれて／なつかしうあいきや  
うつきなからかやうのかたはあなかに／もとねたくうち思ひはなちてなさけ／しくもてなし／すくすなりつらむ  
かしと思ひやるもいとめつらかにあり／かたかりける人の心なりいまより後うちやとめけんとおもひ／やるさへむね  
打ふたけはいかにかまへてぬすみいて、し／かなと思へとかけても我に心をはし露のことはも／かはさはこそあ  
らめさりとてひたふるにみたれ入るへき／やうもなしさはかりこめかしくあゑかなりつるけはひ／有さまには中納言  
のめてたくなよひかになつかしうた、／うちかたらふのみこそ哀に心につきて思ふらめ我をは／なさけなくうかりし  
と思ひ出給ふらんとおもひやるに／涙もと、まらす月を見るにも見るわれからのひとり／こちし思ひ出れはかき  
みたるこ、ちこそせらる<sup>(通)</sup>

(30丁ウゝ32丁オ)

### 〔頭注〕

「見るわれからの」——○前の春の夜も見る我からのとよみ給へる哥也

### 〔二六〕

中納言は／さしてそのこと、おとろ／しからぬ御こ、ちにて過ゆけは／さのみもえこもりぬ給はす大殿うちなどに  
まゐり給はん／とてかくのみはれ／しからぬ御こ、ちをありき侍らん／ほとこそいとしつ心なかりぬへけれよのつ  
ねにおきあかり／なとしてこ、ろみさせ給へ何事もおなし心にきこえ／給はせてすくしつるこそはいつまでと心ほそ

くおほ／ゆる道のほたしにもまつ誰よりも引と、めらる、／こ、ちし侍りつれかくてのみしつみふし給へるを／見侍  
れはいか、なからふへくも侍らすものむつかしう／おほえ侍りと御くしをかきやりつ、はな／とにほひ／みちたる  
御かほに泪をうけ給へるまみのけしきいみ／しう哀なり女君いさ、かを、しくあら／しき／けはひもなくた、うち  
かたらひてすくしつるはつゆ／にても心おくふしましりてもおほえさりつるを我世／にしらぬうきちきりゆへ此人に  
もへた、りおほえぬへき／こと、おほしつ、くるにこたへもやり給はすいと、かほを／引いれて泣給ふけしきなれは  
心えかたくもし我を／おろかなりなと人のきこえたるにやといとほしく心／くるしければうちなきていとうまか  
て侍りなん／御まへに人多くさふらひ給へもの、のけなとのするわさ／なめり心えぬ御けしきのましるはいひおき  
て／いて給ひぬ

(32丁オ―33丁オ)

## (二七)

内にまゐり給へれは内侍のかんの君の御方／に女房なとめつらしかりきこえて日比の物かたり／なとするにそのつゐ  
てに宰相の君といふ人いかにそ／さとのしるへにあらぬ身のつねにうらみらる、かむつかし／さにゆつりきこえてし  
みやことりはあなつらはしわた／くしのこ、ろさしそへられしとにや此日ころはおとなき／こそめやすく侍れとこま  
やかに笑ふ弁の君その宰相は／なやみ給ふ事ありとこそいふなりしかけにひまなく／ゆきあひうるさきまでおとつ  
る、人の此日比音なき／うへなりけれいとほしかりける事かなとき、おとろかれ／てうちよりまかて給ふま、にたち  
より給へれはうち／きくにむねつふる、ものから浅からすおとろかれてたい／めんし給へれは日ころ例ならぬひやう  
さにかゝり侍りて／とちこもり侍つるかいふせさにうちにまゐりて侍り／つるにいたはらせ給ふ事ありて久しくまゐ

らせ給は／すといふ人の侍りつれはおとろきなからとのたまふに／かほあかむこ、ちしていと、しつかならぬ心のうちなから／わさどこと／しかるへきにも侍らねとみたりかはしう／おこりたち侍りぬる時はかたうこきなともせられぬ／くせにてゆてなとし侍るとてもりぬ侍りそのもの／せさせ給ふひやうさ誰にかといふにもうちわすれてひか事／もしつへしこと／しからすいひなせといいたく青み／おもやせて例は見るたひことにうるさきまてよろつに／かたらひみたる、に事すくなにしめりたるはけにおほ／ろけならすこ、ちのあしきなめりと見ゆるもいと／ほしけれと女君の例ならぬけしきのおほつか／ければまことに御けしき猶例ならすけなり瀧の／よとみはつかしけなるまでもやせ給ひにけるかな御こ、／ちのくるしきにはあらしいかなる御心のみたれそとうち／ほ、ゑみていひあてたるにおもてあかむこ、ちすれとこれ／にそうち

### 〔頭注〕

「さとのしるへに」―引哥／○あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

〈錯簡〉 本文↓38丁ウ「(これにそうち) わらはれて……」

### 〔二八〕

〈錯簡〉 本文↓38丁ウ「かくのみなけき……」

### 〔二九〕

思ひよりにけると我ほめをしいひちらしぬ／給へるもいと哀なり

(34丁ウ + 39丁ウ + 41丁オ)

〔錯簡〕 本文↓39丁ウ「めてたかるへき事なれかしこく(思ひよりにける……)」

【三〇】

中納言の御ものまゐらする御まかなひ／に中つかさのめのとさふらひておと、のおほしよろこひて／とくきこえさせよとのたまはせつるよしほのめかしいて／たるに中納言むねうちつふれて浅ましときくに御かほの／さとあかみたるをはつかしとおほしたるなめりと心えて／さはいへとわか御さまやとをかしうつくしう見奉る／女君もいとわひしくあせもなみたもひとつにて引かつき／ふし給へるを中納言も例のやうにそひふし給へれとなに／事をかはきこえ給はんよつかぬ身のうつしさまにてなか／らふるをかりそめにしつ心なく思ひながらその事となき／かきりはた、母うへの人におされぬおほあなつらはしなから／さめるを見すて奉りてはいかなるやみにかまとひ給はんと／のみふようのものとおほしすてすひと日も御らんせられ／ぬをはいとおほつかなきものにおほしたるなとをさま／そむきすて奉りてもいと、つみ浅からすこそあらめと／さすかにすか／しくも思ひた、す有ければつひにをこ／かましきこともいてきぬる我身の心のうちこそ人に／似す心うけれおほかたの世のおほえは近つくやうもあらぬ／身をよにとりてはしれかましう見思ふ人あらんいみしき／事なりしかくてありなからいまたふるされさりけるさまなど／をあやしと思ひあやむる人もあらんたとさま／にいと／うき身のはつかしさなりやか、る身にてはいくよもある／ましきほとひとりあらんと思ひしをくやしうくも／あるかなと露まとろます思ひあかさる、に猶世中に／跡とめんかたもおほえす誰ならんか、る事のありけるを／猶何心もなくいていりましらひつるをいかをこかまし／とうち守る人もあるらんとつく／と思ひあかして／かたみにとみにもおきあからすそむき／にておきいて／給ふとて女君を

ひきおとろかすにいよ／＼引かつきまさり／給へはいとたへかたきわさかな月比もあやしくゆるされぬ／御けしきと見侍りなからくもりなきみつからの心のまゝに／なにも心なく御らんせられつるをよつかぬ身のありさまを／いかにおほしなるそなといとほしうこそなけれ侍る／に心もしらす殿のひとへにおほしとかめさせ給はんこそ／いとくるしけれいさやこれよりすきたるらんこゝろさしの／ゆくゑもしり侍らざりけりや人にはたゝわくるかた／なく御あたりはなれぬはかりをたくひなき事に思ひ侍り／けるしれ／＼しさをみつからこそくやくしくはつかしくも／かへす／＼思ひ給へらるれといとのとやかにいみしうはつかし／けにてしのひかたきふし／＼はかりをうちほのめかして／我心のうちにもいつくをうらみ所にかはと心なからも／おかしうおほゆるにいとしも心うこくほとん心やましきは／なきなるへしとえもいはすにほひやかにうちほゝゑみて／女君のふし給へるを見るにいとゝしきこゝちは泣しつみ／給へるもこしらふへきことのはもおほえねは御まへに／人さふらへやといひおきて御てうつめしておこなひ／給ふにも我心のうちはいたく心うこきあなちにものを／くるしう思ふへきゆゑもなき人はをこかましともよつ／かすともさま／＼目をたて、思ふらんこそいみしうはつ／かしけれなそやすへてつひになからふるおこたりに／かゝるたかひめはいてきぬるそなといと、思ひとちめつる／心地して経をつく／＼とよみ居給へる何となくもの思は／しき御心のすむにまかせてくせいしんによかいとうち／あけていみしうたふとくよみ給ふなるをきゝふし給へる／女君の御こゝちたへかたう悲しくおもてのおき所なく歎き／みたれ給ふをも人はいかてかしらん

(34丁ウゝ37丁オ)

# 〔頭注〕

○うちほゝゑみて／中納言のゑみ給ふ也

【三二】

めつらしうれしき／ことをよろこひ給ひて大殿にもいつしかとほのめかし／きかせ奉り給へるを殿はいとあやしう  
浅ましき事かな／中納言いまはさるかたに世にならひなくましらひたちたれば／よつかぬ身をするとてもさのみ思  
ひなけくへきならぬを／よと、もにいみしくもの思はしけなるけしきなるもかやうに／したにあやしき事の有けるみ  
たれにやとき、おとろかれ／給へといかなることそと問ひきこえ給はんも今はいとはつ／かしけなるさまをやといひ  
なからは、かられてえきこえて／給はす  
(37丁オウウ)

【三三】

人き、は例さまにき、はやし給ひかほなるを中納言／は殿のおほすらんこと中／かたはらいたくおほえていてまし  
／らふも我にはをこかましともあやしとも目をかけて見る／人あらんかしとおほすにいと、人をは雲井にものとはく  
／もてなし世をかりそめに思ひなすかほをいまはもてあら／はして月比は女君をもさるかたに浅からすちきりかはし  
て／おきふしもなつかしうひとつ心にてよつかぬ我身に／たくひ給ふへかりけるちきりも心くるしうよのつねのまと  
ひ／なとありときかれ奉らすもかなとうちの御とのゐなとに／たちとまれるよな／もいかにおほすらんなど思ひ  
は、かられ／ふかく哀と思ひきこえしをかゝる事の後はいやしきも／有けるかなとおほししらるらんと思ふに又はつ  
かしくも／あいなくも心のうちはへたゝるこゝちしてむけにさのみ／うらなからんもをこかましかるへければいとあ  
りしやうにも／むつひ給はぬを女君はことばりにいはんかたなくはつかしう／悲しとおほし入てうちとけてもさらに  
見あはせ給ふ／時なく中のうとくもといふやうに成ゆく御けしきをさは／いへとまことのちきりこそ心にいるらめと

のみこゝろうるに／あなちちにうらみなくさむへきやうもなければけしきも／あらぬさまにひきうけ思ひすましたる  
さま深く成まさり／ておはする折もこのからにたゝおこなひにのみ心をいれて／あかし暮し給ふ大殿うちの御とのゐ  
かちになりたるを／めつらしきことそひては今すこし心さしそひなんと／思ひしをいとあやしと人々も見奉る右のお  
と、もうへも／あやしく中納言のさうしかちに夜かれにこのころ成給へる／かな  
(37丁ウ～38丁ウ+41丁オ～ウ)  
〔錯簡〕 後続本文↓41丁オ「このころ成給へる／かな」いかなる事にか……」

## 〔二七〕〔錯簡部〕

わらはれてしほれすかたは今のみや御らんといたく／みたれぬほとけしきにてあるかなかへりいて給ふたくれ  
の／たとくしき霞の間よりにほひこほれたる桜の花も／にほひおさるゝまてめてたきをつくく／と見おくりてかゝ  
る／人に朝ゆふめなれてわれをは何とかは思はんつきせすつらき／ことはりかなと思ひつゝくるにいと、思ひやるか  
たなくなみた／こほれて露まとろまでのみ夜を明し給ふ  
(38丁ウ)

## 〔二八〕〔錯簡部〕

かくのみなけき／いられ人目もえは、かりあふましくせめわひたまふに／左衛門いと心よはくかたらひなひかされて  
中納言例のうちの／御とのゐなる折く／夢のやうにみちひき入れ奉るを女君は／たひことに涙にまつはれて露にても  
人にけしきき、／つけられていかでなからふへき身そとおほしいりながら／もほのかなるゆきあひのをりく／うつし  
心もなきまで泣／まとひいらるゝさまなまめかしう哀けなるもたひかさなれは／見しられ給はすもあらず中納言のい

とめてたくすくれ／なからよそ／にて人目はかりなさけあるさまにのとやかに／さまよきめ<sup>⑧</sup>うつしにはかういとい  
みしくしぬはかり思ひ／いらる、人を心さしあるにこそと思ひなからけしきにても／人のもりきゝたらん時とおそろ  
しうそらはつかしきに／人しれぬ哀のみしられすもあらずなりにけるも／われなからいというと思ひしらる

(38丁ウ～39丁ウ)

## 「二九」〈錯簡部〉

かくのみのをのみ思ひ／はれ／しからて明しくらすにことにおほしもわかぬに／三四月にもなりぬれはみな人見  
奉り知りて父おと、／も此月ころさしてそこはかとなきおほんこ、ちのかく／のみ例ならぬはもしあるやうあるにや  
とたつねあない／し給ふにもたしかならぬかきりはさもきこえさりつるを／御ゆなとまゐる人々見奉りてさにおはし  
けりときこゆれ／はいといみしくおほしてゑみひろこりて今まで御いのり／なともせさりける事とさはき給ひて中納  
言の心さしなどの／よこめ<sup>⑧</sup>もせずねんころなるさまにさはかりの人さまにては／のこるくまなくてすきありかんもい  
かにかむへきそいさゝか／のまよひなくまめやかなるさまの有かたく世のためし／にも引いてつへきそかしまして  
此人のかほつきに似たる／人さへさしいてなは我家のひかりにこそはあらめと泪／くみつゝいひつゝけ給ひていみし  
くゑみてわたり給ひて／帳のまへに給へるにいとくるしくてね給へるに殿の御けはひ／の近くすれはおきあかり給  
へるにいみしくうれしとおほ／したるさまにてより給ひていかにそ例ならぬ御心地を／今まできかさりける事御いの  
りなともせさすへき事と／なきに泣給ふをあやしかやうにはつねにこゝちなやましく／のみおほゆるをあやしかりけ  
る事の後には物なけかし／心ほそくのみおほゆるをまことにさる事もあらは中納言／いかにおほさんおなしさまにて

見え奉らん事のいみし／さをおほす心まとひにあせになりておはすれはあいなの／御ものはちやとていみしくうれしとおほしたるさまぞ／かきりなきや帰給ひてもさま／のくた物なにやかやと／おほしいたらぬくまなくあつかひきこえ給ひてうへに／とくわたりて見給へときこえ給へはつかしうもおほすらん／あまりけせうになきこえ給ひそとのたまへはいてやそこには／大将と女御の御かた／をこそ思ひきこえ給へれ此御かたに／おろかなるなめりかくしるくなるまでしらぬ人やはある／とし比思ひきこえし<sup>(本)</sup>はいありて我むねをあげ給ふ／へきことゝて御めのと共めしかならずしもえ見しり／給はしけふよき日なりよさりおはしたらんにほのめかし／きこえ給へなどのたまふほとに中納言おはしたりさるや／夜をたにふかし給はぬさまの此人の御心おろかにあは／しからましかはいかにむねいたからまし女は后に／なりても何にかはせん此人にもちひられたらんのみこそ／めてたかるへき事なれかしこく

(34丁ウ + 39丁ウ + 41丁オ)

## 〔頭注〕

○三四月／懷妊也

「大将」——○此大将は四の君の御兄也

〈錯簡〉 後続本文↓【二九】(34丁ウへ)

## 【三二】(錯簡オワリ)

いかなる事にかあるらんと／なけき給ふを見き、給ふ御こ、ち置所なくわひしう／いかてきえうせ身をなきになしてしかなとのみおほし／なるをかの人は左衛門浅からす心をよせたる道のしるへ／なれはこ、ちの有さまなとくはしく<sup>(地)</sup>

きくにいと、／哀にちきりのほと思ひしられてさはれ世のつ、まし／き人目の見くるしさもしらすぬすみかくしてしかな／といられまさり給へとさはた有へき事ならねは思ひ／みたる、事おほかるよにそありける

(37丁ウ～38丁ウ+41丁オ～ウ)

【三三】

中納言の君は宰相／のいとありしやうにはあらずいみしくものをおもひ／いたるけしきもとより此女君に心さし深しとき、／しに此人はかりこそあらめさはいへとこと人はえふと／思ひよらしをさらはこと人よりもうちまもりしたに／思はん事のはつかしうもねたくもあるへきかなと思ひ／よれとさしてさはしりかたき事なりかしなそやいきうき／世の中にせめてなからふへきをやの御思ひなとを／ふかくたとるほとにかゝる事も出来ぬるそかしなと／ちゝに思ひあくかれて見えぬ山路たつねまほしき／御心そやう／いてきにける

(41丁ウ～42丁オ)

【三四】

その比よし野山に宮と／きこゆる人おはしけりせんていの三のみこにておはし／ますなるよろつの事すくれておくれたる事なく／世の人の師とする事かた／のさえおんみやうてんもん／夢ときさう人なといふ事までみちきはめたるさえとも／なりける此世にあまりすきてかしこくものし給ふとそ／むかしはるかくさうとて十二年に一度もろこしにさるへき／人わたしつかはしてかの国のさえをならはされけり／すゑの代となるまゝ、に人のようめこんしやういと、／わろくなりゆくによりたうにわたる人絶にたるを／われもいたらんとせちに申こひてわたり給ひにければ／その国

にもまちうけて日本の人あまたわたりきぬ／わか国にもかしこき人おほかれと道／のさえにはかり／かしこき人なかりきとおとろきあふきてその国の一の／大臣ならひなくいつきかしつきけるひとりむすめにむこに／とりて思ひいたつきけるほどに程なくうちしきり女／二人をうみ置いてその母なくなりけりあらぬ世の人／なるとてもものとはくみつかぬこ、ちもせずこの国は／しらすにほんにておのつから女御后みかとの御むすめを／はしめて見しにかはかりのかたちさましたる女の／たくひなかりきと深く心をと、めてたち帰る御心／も思ひ絶にけるに悲しいみしきはよのつねなり／やかてその国のうちにてはいをもとけ身をもすてんと／おほしけれとかたみにとまり給へる姫君にひきわかれん／事も悲しくおほしわつらひてしほとにその大臣も／つひにやまひつき命たへすしてなくなりければいと、／たつきなくさへなりてありめくるへくもおほされぬに／その時の大臣公卿またむこにとらんとときこえけるを／又人を見るへきこ、ちし給はさりければかけてもき、／いれ給はさりければねたきこ、ろともいてきてころさんと／さへかまふるけしきをき、給ひてをしからぬ命とは／いひなからしらぬ国に我身をはふらかしてん事は／いと悲しくわれをまたなく思ひあかめいみしく心に／つく人のある時こそふるく見しよもわする、心もあり／けれありにく、おそろしく帰りなまほしくおほし／なりて此女君たちを見すてんもいみしく悲しきに／もろこしの海に何州といひけるは女かよはぬ道ときけ／といか、はせん船とむる海竜王もあらはやかてわれも／たひの空にいのちをすてんもをしからすとひたふるに／おほしたちてなくなりにし大臣の子ともにかたらひて／にくるやうにてかへりおほしけるにあしきりう王もいかに／心かはりたる世にか船のよとむ時なく思ふかたの風／こと更におくるやうにて帰りつき給ひにけれと世のためし／にもいひなかせしたうの女のはらに子とも有ける／などいはれしとおほしければ此姫君たちをいみしく／かくしてゐてのほり給ひてあらぬよのさかひになりて／しもけふりとなり給ひし雲井さへはるかにへたゝり

／悲しき事をおほしほれてうち忍ひ比君たちを／かきなてつ、又人をけちかく此世に見るへきものとも／おほされす  
うちたへはて、なくくすこし給ひけり／いか、しけん此みこなんおほやけの御ためにうしろやす／からぬ心そひて  
我こそ国のわうならんも道理なれと／おほしよりたるといふ事いてきてはるかなる山のさかひ／にもはなちつかはさ  
れぬへきを夢のやうにき、まとひ／すへて我此世に例のかたちにてあるおこたりなり／心はかりはあらぬ世に住はて  
なからむけにつきなく／猶君たちの御あつかひをしましりゐたらん事の／つきなさにいかにもわかよと物おもひし  
り給ふまでと／思ひすくしけるいとくやしきこと、おほしたちて／にはかに御くしおろし給ひてよし野山のふもとに  
／おもしろき御や有けるに此君たち引くしつつとも／なく人に見えしられて入給ひにしより後鳥の音にたに／なつ  
かしくき、なれしは音つる、人なきよしの山の峯／の雪にうつもれてすくし給ふ

(42丁オ～45丁オ)

### 【頭注】

「見えぬ山路」―引哥／○世のうきめ見へぬ山路へいらんには思ふ人こそほたしなりけれ

### 【三五】

姫君たちの御かたち／有さまの哀にあたらしくはかなくかきならし給ふ／琴のねもから国のほんたひおほえて人にす  
くれ／給へるをあはれに悲しく見奉り給ひて今は我身／はかりこれよりふかく跡絶なまほしきにまた知る人／なくい  
みしき御有さまともにひたすらうきよをえこそ／ゆきはなれ給はぬほといと所せけれとさりともおのつから／いさ、  
かも人めきいて給ふ道のしるへはかならすいてき／なんと心にふかくおほしさととりてちきりさためたる人を／待んや  
うにおほしける

(45丁オ)

【二六】

中納言はいと、いかて世にあらし／とおほしなる事まさりて花紅葉につけても四方の／山辺にましろゐて人にゆくゑ  
 しられてはひこもるへか／らん谷のかくれ戸峯のほそ道さすかに思ひをそへつへき／所ありやおほしまはすに吉の  
 山の宮の御うへを／くはしくかたり出る人ありてその御すみかなんむけに／世すてはなれたるひしりの御すみかとは  
 見えなから／水の流れ岩のたゝすまひも都にはすへてめなれぬ／さまにても思ひもなくさめかつは心ゆきぬへき御  
 ／すまひなりとかたり出たるをさる人もし給ふとは／みなき、置給へれば世をそむかんにむけに山ふしなと／の  
 あたりにたちよりてその人のてしに成てあらんはさす／かにもおそろしくわひしかるへきを御心はへも有さまも／  
 なへてにはものし給はしかしと今まで我おもひ／よらさりけるよとおほして此かたる人をめして何の／ゆかりにした  
 しくは知りたるそとて問はせ給ふをちに／侍る人かの宮の御てしにてよるひる御あたりもはなれて／ほとけにとりわ  
 き思ひ給ふるやうありてさふらふにさる／へき時きあひとふらひまかり侍ると申すいとうれしき／ことかな我その宮  
 をとし比いかてしり奉りてまゐり／かよひて世に絶たるきん<sup>平</sup>ならひ奉りまた見およはぬ／ふみの所／き、あらはさ  
 んと思ひなからさはかりすみ／はなれたる所ある御心によもうけひき給はしとおもひ／は、かりてくちをししく思ひす  
 くすを御けしき給はらせ／よろしくおほしめされはいみしくみそかにまゐらんと／いとねんころなるけしき<sup>宮</sup>にてかた  
 らひ給ふいとさは／やすき事にさふらふなりと申せはさらは此ころの／ほとにまゐれとのたまへはいにけり

(45丁オ～46丁ウ)

【三七】

をちの僧にしか／＼殿の権中納言との、かう／＼申させ給ふとくは／＼しくきこゆれはさき／＼さるへき人まゐり給ひ御せう／＼そことも申させ給ふもありしかとすへてまた世にあり／＼けりと人にもき、つけられしとてさらになんきこしめし／＼いれぬものとなりたれば此四五年は音つれきこえ／＼給ふ人もなかめるをいかなるへきことにかはいかにも御けしき／＼給はりてきこえんとてしはしと、めてかう／＼なんわさと／＼なにかしかをひなる人をつかひにて給はせたと申せは／＼とはかりうちおほしめくらしてさはかりゑいようにまと／＼はれてめてたきてふは<sup>花</sup>なの事のみこそ心にいらめ／＼いかにき、給ひてかふかき山までおほしいるらんそれも／＼さるへきえんにもものし給ふ人にこそあらめいとうれしく／＼なたちよらせ給へといと御心にいりたるけしきにて／＼すか／＼しくうけひき給ふをいとあやしけれとおほし／＼うる所あるにこそあるへきとこ、ろえていとかたき事と／＼いとほしくかひなくて帰り給はん事を思ひつるにかう／＼／＼なんのたまはするとかたれはよろこひなからかへりまゐりて／＼くはしくきこゆかつ／＼思ひかなひぬるこ、ち<sup>地</sup>してうれ／＼しき事かきりなしあなかしこかくなんと人にきかすなと／＼口かため給ふ

(46丁ウ～47丁ウ)

【三八】

此たひあまり世をそむきなん事あへなかるへし／＼とおほしなん又よかなりとうけひき給はした、人の／＼御有さまを見奉りて此世ならすたのみ申よしをちきり／＼きこえて此たひは立帰りにんとおほせは夢いみしく／＼さはかしく見ゆるとつくる人あれはきよきわさせさせに／＼七八日はかり山寺になん有へきそことしられぬれはこ、ろ／＼あはた、しく人々來なとしておこなひもまきる、こ、ち<sup>地</sup>／＼すなといひまきらはし給ひて出たち給ふとても女君とは／＼二三日ともへた、

るへきほとはおほつかなかるへきことを哀に／なつかしくうちかたらひさるかたに浅からぬ御中と見えしを／此事の後ほかの御心のうちの人目もをこかまし／ければさしもあらす成にたるを女君はいとはつかしく／悲しきものからかゝるにつけてもあなかななる人の／ちきり浅からぬ哀はこよなく身にしみたるもわれ／なからいと心うし中納言もさこそおほすらめとおし／はかるもそれをうらむへきゆゑある身かとは思ひはなれ／よろつを見き、しりかほならぬそねたけなりける

(47丁ウ 48丁オ)

### 【三九】

御とも／にはしるへせし人はかりさては御めのと子やうの人したしく／おほす四五人はかりいみしくしのひてまうて給ふ九月／はかりなれはむら／けしきはみゆく山のけしきも／哀なるにまた見もしらす遠くわけ入給ふまゝ、に心／ほそくあはれに殿うへなに事かおはしますらんとおほ／つかなくかりそめとおもふ道たにかうこそおほゆれまして／いまはと思ひたらん程と人わろくおほししらる／

中納言

涙しもさきにたつこそあやしけれそむくたひにもあらぬ山路を

道よりしるへの人さきたて、奉り給へは御しつらひかき／はらひつくるひて御そ奉りかへなんとして待きこえ給ふ／日やう／うちいるきはにそおはしたるよし御せうそこ／きこゆるもいたくよういして入おはしたりふせんれうの／所／秋の草をつくしてぬひたるさしぬきに尾花色の／さうかむのあをにくれなるのうちたるぬきかけて光を／はなちてはな／とめてたくた、今こくらくのむかへありて／くものこしよせたりとも猶と、まりて見まほしき御あり／さまなり何事もみな口をしくあせゆく世のすゑ／なれとかゝる人のものし給ひけるよとおとろかれて／とはかりまも

り給ふにいと、もてしつめてさふらひ／給ふみこの御有さまもいと清けにおはしける人の／おこなひにやつれ給へる  
さま色白くかしらいと青やか／にあてにやはらかにて思ひやりきこえつるほとよりはわかく／きよけにおはします

(48丁オ～49丁オ)

【四〇】

御ものかたりやう／うちとけゆく／まゝにさえのほとと此世にあまりてこと／にすくれ／たりける人かないか  
てか、らんとめつらかにおほす姫君たち／の人めき出給はんしるへなりと御心のうちにさとりおほせは／いとなつか  
しくうちとけ給ひてむかしよりの事とも／をみなもろこしにわたり給ひてありしさま悲しいみ／しきめを見てよに  
なき女二人をは見すてす例なき／やうなる事のおとき、かしこく身にそへてうかりし世の／みたれにもひきかゝり猶  
此人／を道のほたしにて／これより深くも身をえかくさぬよしをいひつゝ、け給へるも／あまりすくしてひしりたち  
ても見えすあてやかにあはれ／けにうちおほしのとむるけしき見る人も涙と、めかたき／に我もなく／さてももの  
し給ひかたく今の人目は／人よりけに心ほそくもくちをしくもあるへきにも侍らねと／いはけなきよりあやしくよに  
たかひ人に似ぬ有さまにて／やう／もの思ひしらるゝまゝに世にありにくゝ思ひなる／さまをきこえ給へはみなさ  
見え給ふ所あれはうち泣／給ひてしか涙をと、めてひしりはのたまふやう御心ならず／おほすへき事なれとそれしは  
しの事なりいかなるにも／此世の事ならすさきの世の物のむくひなれはともかくも／人のおほすへき此世に世をなけ  
き人をうらむるなん／いと心をさなくさとりなき事に侍るへき更におほしいとふ／へき御事にも侍らすつひには思ひ  
のことかみをきはめ／給ふへきちきりいとたかくものし給はめくはしくきこえ／させすともおのつかからさいひきかせ

しとおほしあはする／やうもあらむうたてさう人めかしくきこえつ、けしと／のたまふをいかに見給ふにかあらんにはかによつかぬ身を／何ゆへにか身をきはむへにかとおほす女君たちの御／事はか／しき身には侍らすとも世にめくらひあらん／かきりはうしろみ奉りてんさらにその御事うしろめたく／なおほしめしそときこえ給へはむかしよりさらに人に／かゝる事ありときかせ侍らぬをさるへきにやあやしき／とはすかたりをきこえ出づるもよのつねの事などと思ひかく／へきならすかうなからも女のみすてつれと捨られすそむ／かれぬものにてあひとふらひ給ふ人なくては侍るましき／わさとはかりを所せく思ひ侍れと人のちきりすくせ<sup>世</sup>みな／侍るわさなれはさらに此山に世をつくせなともゆいこん／すへしとも思ひ給へす思ひおきて侍れとすくせ<sup>世</sup>といふ／もの侍れはそれにもかなひ侍らし人き、おとろ／し／からすおもりかに身をもちひよとも思ひ給へす只すく／せ<sup>世</sup>に任せてもなんその程のいまたはるけさにやといと心／くるしきかうるさく思ひ給ふるなとうち泣つ、つくす／へうもあらぬ御物かたりにもあけぬめてたくなつかしき／御あたりに御ものかたりとでもろこしから国までおほつか／なくと、こほる所なくちこくのそこさうとのおく<sup>浄土</sup>まで／くもりなきこゝちするによりつつ心ゆき身のなけきをも／さましてかつは哀に悲しき事おほくいみしきにたち／帰るへき心地もせず此世にまたもてつたへさりける／ふみともひろけて見せ給ふに此中納言の御さえさとの／たへなる事もろこしにもならふ人なしと思ひたりし／われにもおとるましかりめつらかななる人かなと／おほしおとろかるたい出してふみつくらせ給ふに／おもしろく悲しき事もろこしよりもて傳へたるふみ／ともにまさりてつくり出かきいて給へり手のさま筆の／き、めつらかにいみしき人をも見るかなやんことなき人に／こそあはれとおほしおとろきてうちうなつき給ふふし／／あれはめつらしう見給ふ

(49丁オ～51丁ウ)

〔頭注〕

○さえのほとと此世にあまりて／よし野の宮の御心中納言の才を感じ給ふ也

【四一】

はかなくて二三日つきぬ／宮は此人の御ありさまさえのかきりなきにめて、おこ／なひもけたいし給へりきんの御こと  
とをいとゆかしけに／おほしたれは深き夜のすめる月にかきならし給へる／もの悲しくおもしろき事たくひなしすこ  
しはかり／にてさしおき給へれはとりてひき給へるさらにおなし／しらへをふとき、とりていとおもしろきまで残り  
のねは／きこえさせつるほたしものはかなき人にをしへ置侍り／しにたかはすひきとりたりとおほえ侍る山ふしの  
よしの／の峯の山おろしに耳ならして侍るひか耳にやされと／わさとたつねさせ給へるよろこひにはうとう思ひきこ  
ゆへき／にも侍らすとて姫君の御かたにわたり給ひてかゝる人／たつねものし給ひて日ころものし給へるをこなたに  
て／ものなときこえ給へなへての人のやうには見えぬ御有さま／なりゆくりに人目あやしかるへけれとうしろめた  
うは／見えさめりとてさるへきさまに引つくるひてあかつき／ちかく出る月のきりわたり哀なるに御せうそこあれは  
／えもいはすにほひみちてまはゆきさまにておはし／たれははしちかくなかめ給へる姫君たちいとはつかしくて／引  
いり給ふをたゝきこえんまゝにかはかりよつかぬ御すまひ／には何かはよのつねにもてなし給はんもたかへりうしろ  
／めたくは有ましきをとこしらへおきて我御身はあなた／におはしぬ

(51丁ウー52丁ウ)

【四二】

此御かたはすこしおくに引いりてちひさやかなる／しん殿のいとことさらにことそきたるしも見所ありこゝろ／と、  
めてもてあそひ給へる人の御すみかと思ふうちとしめ／／と人けもせず水にうつれる月はかりそさやかなる／か、  
る所にいつとなくつく／／となかめ給ふ女君たちの御心の／うちいかなんといみしう心くるしく思ひやらるゝにこ  
のよ／ちかきかたはから国のこゝちものすく／／しう深きものゝ、／哀などはしられ給はすやあらんなどおしはかるも  
ゆかし／きに人こゑもせねは／

中納言

よしの山うきよそむきにこしかともことゝひかくる音たにもせず

わりなのわさやとなかめいてゝうち泣給へるけしきいみしう／なつかしう哀なるを都の人たにたくひなく思へる中の  
／おもひにもゆる人おほかるにまいてなへての人たに見ならひ／給はぬ御こゝちとも浅ましきまておほさるゝに御い  
らへなど／おもなくきこえいつへき人もなければいとつかしう／わりなけれと久しうなるもかたはらいたくてあね  
宮少し／いさりよりて／

姫君

絶すふく峯の松風われならていかにといはん人かけもなし

ほのかなるけはひいみしくあてに心はつかしくよしあり／心にくきほと都にもかばかりのけはひは有かたうおほ／ゆ  
るにいつれならんと思ふもいとゝ心もとなければ／

中納言

おほかたに松のすゑふく風の音をいかにととふもしつ心なし

よのつねのけさうひてはあらねとたゝ哀に心ふかしもとより／われも深くたつねいるよしをいみしくなつかしけにい  
ひ／なし給ふにすこしおもなれゆくにやをり／／浅からすさし／いらへ給へるいみしくをかしき人のけはひ心はへわ

れ／にてはかひなくもあるかな宮の宰相はかゝる人世にもの／し給ふともいまたきゝつけぬにやあらんいかにきゝま  
とひ／心をつくさんとまつ思ひ出られて我身もなつかしく／うちゑまれ月はくまなくきりわたりたるに虫のこゑ  
／／みたりかはしく水の流れ風のおと鹿の音など／ひとつにきこえて哀をそへて涙をもよほすつまとなる／所のさ  
ま人の御有さまなり  
(52丁ウゝ54丁オ)

【四三】

かゝるみすのといまたならひ／侍らぬ事にてはしたなくおそろしくこそ思ふ給へら／るれなとうとませ給ひそとてや  
をらすへり入給ひぬ浅／ましくあきれまとひ給ひてうつふし／給へるを／あか君かくなうとませ給ひそなれ／し  
き有さまは／よに御らんせられ侍らしかたしけなきことなれとあやし／なから今ひとりたくひあるとおほせといとの  
とやかに／なつかしくこしらへなくさむれと夢のやうに思ひさはき／給へるいとことほりなるに中の君も身にそへて  
ゐさり出／給へりければうちそひ給へるなるへしさふらふ人／／などこはいかにとあはたゝしく見るもあるへかめ  
れといつ／となくかゝる御すまひを心ほそきことゝ思ひなけく心とも／なれはかうめつらしくめてたき人のおはする  
ときゝて心／ときめきしおの／のすかたともうちなえはみたるに／かゝやかしく入ぬるそたのもしけなきやこはい  
かにとてより／くる人なきよとわりなきに人のもてなしもあやにくに／いまめかしくなともあらすたゝなつかしけな  
るにわれ／のみ思ひさはかんもあまりなるに心をのへてあね宮へたて／なしとはかゝるをのみや人の思はん所も浅ま  
しと／あはめ給へとそはたゝおのつから心やすくおほしなせ世の／中にめくらひ侍らんかきりはいかて心さしのかき  
りを／つくして御らんせられにしかなと思ひ給ふるにはあまり／おほつかなくへたて多かるこゝちしていふせく侍り

ければ／た、うらなく我も人もうとかるましきよしを思ひ給へ／よりてなんなときこえ給ふにやう／／なくさめても  
のし／給ふ中の君いとわりなくて引かつきてうつもれ入給ふを／けに心くるしくて几帳さしかくしていれつ心うくも  
／へたてさせ給ひぬるかないつれをもおなしこと、こそ／思ひきこえさすれとうらむるにうちつ、き給ひぬへき／け<sup>(気)</sup>  
しきなればよのつねめかしく引と、めて只うち／そひふして此世ならすちきりかたらひふし給ふさま／の露はかりう  
とむへきやうもなきをいかてか見しり給は／ぬ人のあらんた、いとわりなくはつかしうかうやうなる人の／ありさま  
を見しり給はぬにあやしうもうしろめたうも／おほゆあけゆくにいと、わりなくはしたなしとおほえ／たり白きひと  
へかさねはかりなよ、かなる御すかたいとも／ほそやかにものよりめかけいてたるさましてかしらつき／かみのか、  
りなへてならすうちやられたるほとうちき／にもいとおほくあまれるなるへしゆゑふかくもて／まきはし給へるそ  
はめいとくまなく白くうつくし／けにていはんかたなくけたかくきよらにもものし給ひけり／もろこしの人めかしくけ  
とほく人に似ぬ所やなど／ゆかしさにかはかりみたれつるをいとあてに見まほしき／御有さまかなと哀にめてたくい  
よ／／心のかきりたのめ／ちきり給ふをとこの御さまはたさならいみしくめて／たきあさけの御すかたをかたみに  
いとめてたしと見給ふ／にもあかくなりゆけは出給ひぬ  
(54丁オー56丁オ)

### 【頭注】

○今ひとりたぐひあると／我をも兄弟とおぼせと也

### 【四四】

をかしかりける人のさま／かなと思ひ出られて御ふみきこえ給ふ／

中納言

いまの間もおほつかなきを立かへりをりても見はやしら菊の花

とよのつねめきたるをむけにさやうにとりなしけしきはむ／を姫君はいいなく人のけはひのなつかしく哀なりつる／  
にそこはかとなくうちかたらはれつるをいまそいかなり／つる事そと浅ましくはつかしきにこゝちさへたかひて／お  
ほえ給へは御返りもきこえ給はぬを人ゝいみしく／かたはらいたかりきこゆれとかならずさしもきこゆへきこと／か  
はとてやみ給ひぬ暮ぬれは例のそなたにわたりて／月を見つゝ、うちかたらひことの音もかきあはせつゝ、明すに／心い  
りはてゝ立帰るへきこゝちもせず  
(56丁オウウ)

【四五】

はかなくて日ころ／おほく過ゆくにかくへたてなきさまにとき、給へといか／なる事そなともおほしおとろかすいと  
よううちかたらひ／ておはせとのみきこえ給へはいと、いかてかへたてもあらん／さりとして身をはかへぬものからか  
くて有へきならず殿／うへいかにおほつかなくおほしなけくらん右のおとゝも／いみしうらみなけかるらんかしみ  
つからの御心ひとつ／こそさしもおほさるめとさま／思ひやらるゝ事／おほかるにさのみも絶こもり給はて出給  
ふとて宮にも／あさの御ころもほうふく御とのるものとまことに峯の／松風おとにのみき、給ふはかりあららかに  
て奉り給ふ／かみしもさふらふ人ゝ姫君たちの御れうれなゐの／かいねりにおり物のうちきなとよになき色あひに  
して／さらぬきぬあやなといふもの多く奉り給ふ御扇など／なへてならぬさまなるを更にあまりこちたくかゝる事／  
は思ひ給へすてゝ、しものをほいなき事になんなどのた／まへと人からのいとあてに心はつかしけなるに心のまゝにも  
／かへさまにくゝてほたしにかゝつらひ侍る人ゝのうへは／たのみきこえて心やすくなんこれよりふかくし給へいり

なん／とするよしをうちかたらひてのたまふ中納言も更なることは／きこえせんかたなく、る御すまひもうつろはしきこえ／侍らんとなん思ひ給ふるときこえ給へはそはた、いましか／ゆくりなからんとは御ためも人き、ひんなく侍りなんか／なからもおほしすつましきさまにたに思ひ侍らはうしろ／めたき思ひなくさみ侍りぬへくなどちきりかはして／御おくりものにもろこしよりもてわたり給へるよになく／此世につたはらぬくすりともあるかきり奉り給ふ／姫君には立かへりかきりなき心さしをちきりおきても／あかすあはれなれば／

中納言

しつ心あらしに身をそくたかましき、ならひぬるみねの松風

女君も目もあやになつかしうあはれけなる御有さまを／見さらんは今すこしさう／しきさまさりぬへくおほえて／  
年を経てき、ならひつる松風に心をさへそそへてふくへき

我ならさらん人に見せきかせまほしうめてたき御有さま／けはひなるもあかぬ心地してかへり給ふ

(56丁ウ～58丁オ)

## 【四六】

野山のけしき／やう／色ふかくなりけりはかなく日比にもなりにける／なと哀にてまつ殿へまあり給へれば猶二三日かと／こそ思ひしを日比見え給はさりつれば心をまとはして／おもはぬ山なくいつくにもしの給へるそよはなれて／人にしられてありき給ふは猶いとかる／しき事を／とて日比はものをもさ／まゐらさりけるをいまそ／御まへに物まゐらせ給ふつゐてにもろともにきこしめす／よつかぬ御有さまをいまはさるへきなりけりとか、るさまに／つけてもめてたくすくれて世にましらひつき給へは／おほしなくさみはてつるにうれしくいみしとおほし／たる御け

しきいとあはれなり見れとも／＼はなやかに／あくよなくめつらしくうつくしけなるをうちゑみて／つきせすまほり  
給ひて右の大殿も日比思ひなきて／心くるしきことのそひてしも心とまらぬやうになりゆく／こそなけれけな  
とてさはた見ゆる人めはめやすく／もてなしてこそなとをしへのたまはせてそ、のかし給ふ／ものから世にあらんほ  
とは猶朝ゆふのへたてなく見え／給へとて涙くみ給ふ  
(58丁オ～59丁オ)

【四七】

右の大殿には四五日といひおき／給ひし十よ日におよふまでおともせずさきこもり／給へりつるをおほつかなくあや  
しきことに思ひなけき／おと、は物もまゐらすおほしなけきたるを女君はわれ／ゆへかくのみのをおほすといとほ  
しく悲しきにつねに／心ほそけにて世中にありはつましきさまの所思ひ給へる／人なれはいかにおほしなりにけるそ  
といみしくよろつに／思ひみたれさはくをもしらす宮の宰相はこれを／よきひまとなく／こかれまとひ給ふ心よは  
くみち／ひききこゆるよな／を心うしと思ふかたはかたとして／これこそはまことに深き心さしなめれと思ひしら  
れ／ゆくあはれも浅からすうちなひき腹なといとふくら／かにうちなやみ思ひみたれたる人さまのかきりなくいみし  
／きをしのひつ、ほのかに見る宰相の心まとひそこと／はりなるかたみに涙にまつはれつ、立わかれ給ふよな／  
ものをのみおほしまさるに殿はいてやなとおほしのとむる／所なく御きよめをさへし女房つねよりもあさやかに／さ  
うそきけさうせよとさへ立さはき姫君をもなと／かくてはふし給へるとせめておこしすゑてよろつに／つくろひすゑ  
給ふもかたはらいたくるしきに入給ふ／おとすれはもの、うしろにおと、は立かくれてのそき／給へは日比のほと  
にかたちは今すこしにほひまさりに／けるこ、ちしてはな／とあいきやうはあまりあたりにも／こほる、やうにて

いとのとやかについゐて女君にさしより／てしはしと思ひ給へし山里見まほしきふみなとの侍り／けるをえ見さし侍らざりつるほとおほつかなしと尋ね／させ給ふやとこゝろみ侍りつるにすき侍るをり／もかひ／なく思ひわひて人わろくこそ立かへり侍りぬれと／きこえ給ふに御いらへせんかたなくていと、しくそはみて／かほをもてまきらはしていらへ給はさめればさもや／いと、おほしのみこそうとませ給ひにけれめつらしや／なとおほしなほるとこそ思ひ給へしかなしりめに／かけていたくもうらみこしらへてた、うちなかめいて／給へるそいみしく心やましき女君の御袖くちすその／つままであてになまめかしくたを／として御くし／のひまなくかゝりうちきのすそになかれゆきたるすゑ／つき絵にかくともよのつねなりやきはもなくうつくしけ／なるさま見てもあかぬ心地すすへきをさまよきほとに／いひなしていたくもなれよらぬを見たち給へるをやの／御こゝちといみしくうらめしうむねいたけれどさし／ならひ給へること人ならひたゝましよとそ人わろくみな／され給ふや女君うちふしてもなつかしう哀にうち／かたらひちきりつゝ、さるかたに浅からざりし御けしきの／引かへこよなくこまやかならす成にたるもいとことほりに／我身はつかしくつゝ、ましう又我心のうちもへたて／なくしもあらぬに中のうとくもといふやうにそむき／／になりぬるをさはいへとまことならぬちきりを／あさくおほしなるにこそはとことほりにうらみ所なき／に我身はつかしう思ひしられてかゝみのかけを／うらみてもおほとかにあてにおはせん女はたゝなつかしう／あはれなるよそのかたらひしもこそあはれなるへけれ／と我よりふかくおほしなひかるゝかたのあらんよと／思ふになまこゝろうけれとそのまゝにうらみいはんも／あいなければさはれかくと世をかりそめに思ひなす／にはうきもうからすとなん／

(59丁オ～61丁ウ)

後ろ遊紙…ナシ

大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」(第一冊) 翻刻・その1

(以上、第一冊)